

O B A R A

松本市小原遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1990・3

松本市教育委員会



O B A R A

松本市小原遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1990・3

松本市教育委員会

序

芳川地区は東山道覚志の駅があったところといわれ、歴史的に重要な場所として研究者の関心を集めておりました。実際、昭和62年に行なわれた高畠遺跡の発掘調査は、古墳時代の住居跡から他の地域よりはこび込まれたと思われる土器が出土するなど、芳川地区の歴史的重要性をあらためて確認できるものがありました。

折しも県道環状高家線が、当地区的遺跡の一つである小原遺跡を通ることとなり、工事に先立って、文化財保護の立場から記録保存を目的とする緊急発掘調査が必要となりました。調査は松本建設事務所から松本市に委託されたもので、市教育委員会職員を中心に地元考古学者、地区的皆様の御協力により、平成元年5月29日から7月29日にわたり行われ、幾多の成果を認め無事終了することができました。なかんずく非常に珍しい円面硯の発見は芳川地区の重要性を一層裏付けるもので、今後も周辺の調査によりさらに歴史的解明が進むことが期待されます。

最後にこの調査にあたり多大な御理解と御協力を下さいました芳川公民館、芳川出張所および地元の皆様に深く感謝申し上げ、序といたします。

平成2年3月

松本市教育委員会教育長 松村好雄

目 次

第1章 調査経過	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査体制	1
第2章 地形と地質	3
第3章 調査結果	
第1節 調査の概要	7
第2節 周辺遺跡	7
第3節 遺構	11
第4節 遺物	49
第4章 調査のまとめ	71

例 言

1. 本書は、平成元年5月23日から7月31日にわたり実施された松本市芳川小屋に所在する小原遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は松本市が長野県松本建設事務所より委託をうけ、松本市教育委員会が行ったものである。
3. 本書の執筆は下記の通りであり、下記以外のものについては竹内博長が行なった。
- 第1章 事務局、第2章 第1節 太田守夫、第2章 2)・3) 高桑俊郎
4. 本書作成に関する作業の分担は次の通りである。
 遺構図整理、トレース：赤羽包子、開島八重子　監査作成：川岸命子　遺物復元：松尾明恵、神沢ひとみ　遺物尖測、トレース：松尾明恵、野村悦子(土器)、上條尚美、吉沢克彦(鉄器、石器)　写真撮影：宮崎洋一(遺物)
5. 本書作成にあたり、出土遺物に関して野村一寿氏(御長野県埋蔵文化財センター調査研究員)にご指導、ご教示をいただいた。編集は鴻沢智恵子の協力を得た。
6. 本書で使用した地図は、松本市発行の松本市都市計画図(1:15,000)、松本市基本図(1:2,500)を複製した。
7. 本調査にあたって次の方々よりご協力を頂いた。記して感謝申し上げる。
 古町 茂、片瀬建設工業所、曾根原鉄工、長野県厚生年金健康福祉センター・サンピア松本、芳川土地改良区、松本市役所芳川出張所。
8. 本調査に関する事務書類及び測量図面類、写真、遺物、尖測図などは松本市教育委員会が保管している。

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経過

昭和63年11月2日、松本建設事務所と新年度に実施を予定している道路改良工事に伴う埋蔵文化財の保護について事前協議を行ない、小原遺跡についても発掘調査を実施することとなった。原因事業である（主）松本環状高架線は、当市西部地域の道路整備の一環として昭和49年頃計画され、昭和61年頃までに当遺跡の西側に位置する松本流通業務団地内まで完成した。本年度は国道19号線までの約1000mを完成させ、平成2年に供用開始を予定した。当遺跡は本年度の工事予定内にあるので文化財保護法に基づいて記録保存を図ることとなったものである。

当遺跡の所在する芳川地区は今まであまり知られていなかった所だったので、地元の芳川史談会の方より話しを聞いたり、現地踏査によって遺跡の範囲を推定した。この結果、範囲はJR線路を挟んで東側と西側に、南側は芳川小屋の集落内へかかっていると思われ、道路は遺跡の中心部を東西に開通することがわかった。既出遺物としては、平安時代の須恵器、土師器が知られており、同時代の集落址が予想された。また付近に中世の寺院址があるのではないかという地元史談会の話しあった。

発掘調査は7月中旬までに終了する予定で5月23日から開始した。

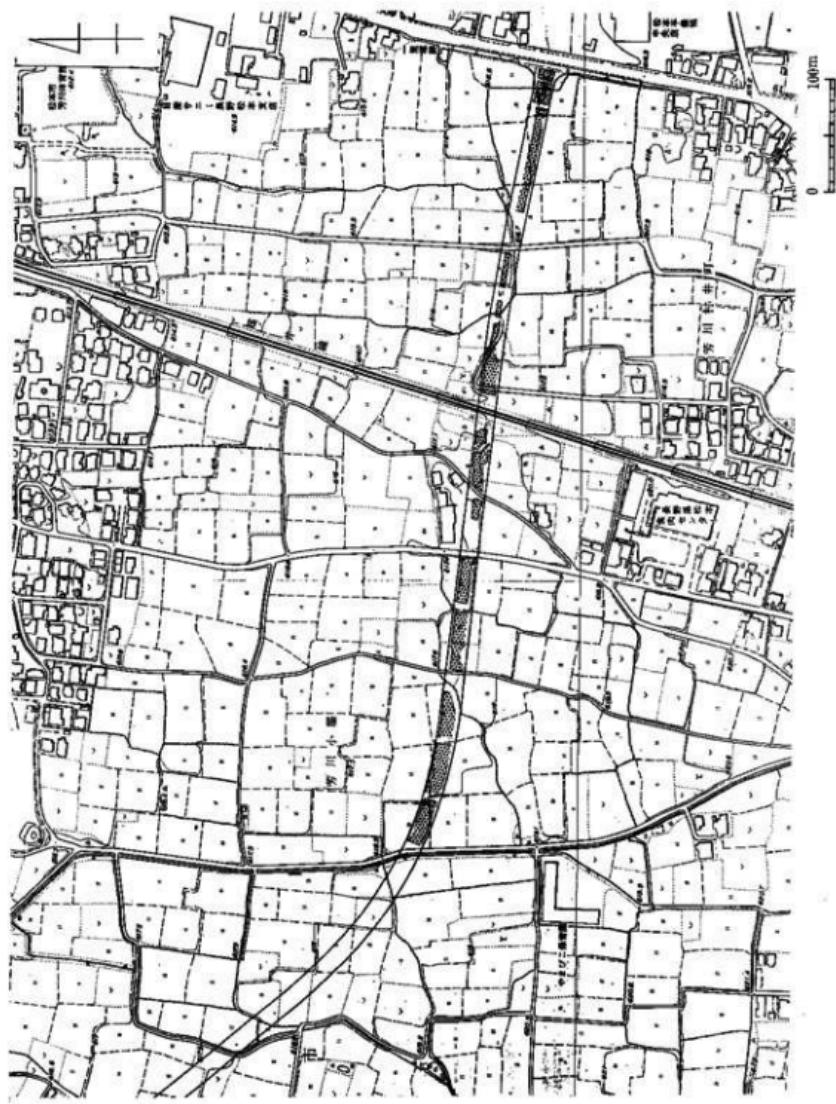
第2節 調査体制

調査団長：中島俊彦（～6/30）、松村好雄（7/1～）（松本市教育長）

現場担当者：高桑俊雄、竹内靖長

調査員：太田守大

協力者：赤羽 章、赤羽包子、赤羽きみ、赤羽宏子、青木雅志、五十嵐周子、伊丹早苗、今村嘉子、乾 靖子、内沢紀代子、海野洋子、多田邦彦、奥原富藏、小野光信、開島八重子、小島茂富、兒玉春紀、田口吉重、田多井うめ子、田多井 宜、遠山 明、中村安男、林伊和夫、丸山久司、村山正人、百瀬二三子、百瀬義友、矢島利保、横山篤美、米山明子



第1図 調査地の位置と範囲

第2章 地形と地質

1 位置と地形

本調査は松本市芳川小屋・村井町の北部に位置する。県道環状高家線の建築未了地である国道19号線と流通團地との間の道路敷に当たる。JR篠ノ井線と直交し、篠ノ井線より東へ国道までおよそ320m、西へおよそ390mの帯状の地域である。

地形は一見同一地形面と思われるが、北流した奈良井川の洪積扇状地（洪積層・洪積面）の末端を、東西から挟んだ形の田川と奈良井川の沖積扇状地性堆積（沖積層・沖積面）とから成っている。奈良井川の洪積面と沖積面との間には、上流から続く50~70cmの小段丘崖が、田川との間には30~50cmの小段丘崖が現在でも見られる。発掘地の洪積面の幅はおよそ100m、真ん中にJR線を挟む。末端は発掘地から北200mで、沖積面に姿を没している。堆積層で見ると、奈良井川の洪積扇状地層は大礫が中心で、黄褐色のローム質土、奈良井川の沖積層は現河床に続く地層で、中礫が中心の灰黒色砂質粘土、田川の沖積層は現在の田川に続く地層で、中礫が中心の赤褐色に汚染された土・礫の地層で区別し易い。たまたまこれらの堆積層を、発掘地域が東西に帶状に切ることとなり、さらに明らかとなった。洪積面は水利の関係もあって主として畑地、沖積面は主に水田として使用されていた。遺跡は洪積面を主とし、奈良井川の堆積面へ広がっている。

2 堆積層と礫

挿図1は発掘地の堆積層を東西に切った地層断面図である。発掘地の中心とこの堆積層を作った奈良井川、田川との距離は、それぞれ1000m、750mである。二河川が同一平面上（標高610~620m）で初めてまた最も近接した地域でもある。この地域から北は相互の沖積はん濫原による複合が始まっている。

挿図1-(3)は発掘地の中央、奈良井川の洪積層の断面である。この洪積層は奈良井川段丘地形の郷原面（森口面）から続くもので、黄褐色ローム質土・礫混じり黄褐色ローム質土と大礫の多数から成る、厚い礫層が特徴である。前者のローム質土は、後者の礫層と並列または介在の状態をとり、場所によっては厚さ2mにも及ぶ。礫層は幅5m、厚さ2mを越えるものもあり、明らかに河床の姿を示す。発掘地でもJR線の東に礫層、西にローム質土が広がり、遺構は大体この礫層を避けているように見える。発掘地での方向はN50~60°Eで、およそ南北からの流れを示している。これら堆積状況や堆積方向は、同じ地形面にある小屋集落と同様の円礫、亜円礫である。

礫の大きさは大・中礫で、そのうち大礫が多数である。礫の種類は硬砂岩が多数で、砂岩・チャートにわずかの花こう岩・粘板岩（頁岩）・珪岩・輝緑凝灰岩が混じる。

次に奈良井川の沖積層の断面を示したのが挿図1-(4)・(5)である。上部の地下30cmまでは、現在

の水田耕土であり、その下部の褐色砂質粘土は自然堆積と見られ、この層の50cm前後で中世の遺構や遺物が発見されている。60cm以下の下部層は地下1mにある礫層との間に砂質粘土の層を挟むものと、礫層を挟む層に分かれている。

これらの下部層は礫層の示す南西(N50°~60°E)からの流れの方向にしたがい、礫層に並行あるいは介在して延びている。したがって東西に切った断面で見ると、下部層は砂質粘土、礫の堆積を繰り返していることになり、土層の深浅が生まれてくる。この堆積状況は小屋地籍の奈良井川の河岸に近いはん氷原を除いた地域と共通した現象である。礫の大きさは大・中・細の円礫・亜円礫の混合で、大礫も10×12cmを越えることは少ない。礫種は硬砂岩・砂岩が主で、チャートが加わる。

田川の沖積層は一見して奈良井川の状態と違うことが分かる。挿図1-(1)(2)はこの状態を示したもので、田川水系の堆積に共通する鉄分による汚染、沈着が目立つ。礫は地下30cm以下に礫混り土、礫層としてあるが、細礫と中礫の円礫が主で大礫は少ない。礫の種類は砂岩・緑色凝灰岩・石英閃綠岩・安山岩・砂岩や緑色凝灰岩のホルンフェルス等東部山地からのものが多い。礫の分布は深さ30cm、60cm、1mの面に見られ、深さ30cmのものは細礫の薄層である。深さ60cmのものは厚さ20cm前後と幅1~4mで、流れとして堆積したが多く、その走行はNNE10°・20°・30°・40°・50°・70°等で、なかには明らかに蛇行を示していて、当時の状況がうかがえる。また60cmの面には土層中に礫の散乱が目立つ。この面で住居址が二つ検出されている。深さ1mのものは厚さ25cm以上、上面に砂礫をもち、中礫を含む細礫層で、粒径がそろい褐色に汚染しているのが特徴である。これと同様な堆積が堆積層近くにもあり、走行NW40°、幅1.5m、厚さ20cm以上である。いずれも長期間の自然の流れか、用水路として存在したものと考えられる。

地形的には奈良井川の洪積層と、高畠遺跡(1987年報告)の高まりとの間に出来た凹地形である。この地形面は上流の田川や、北方の平出地籍のニアンドせぎと連なるところから、田川の古い流路とも考えられる。さらに地層上は三つの礫層の存在により、深さ1mの地層の範囲に3回の堆積の更新があったと見られる。この地域は古くから水田域に利用されているため、自然地形か人為の加わった地形か判断が難しい。

3 地形の形成と遺跡

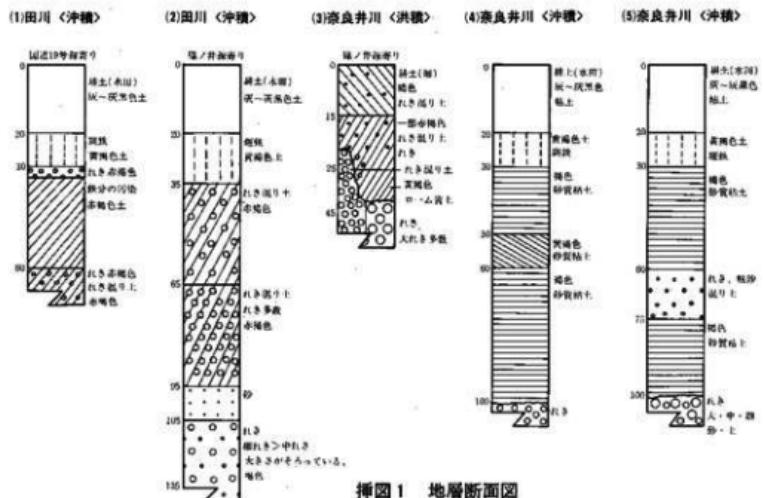
以上の考察で分かるように、発掘地付近の地形の形成の順序は、最初に奈良井川の洪積面(層)の堆積から始まる。この年代は鷹原面(森口面)の延長から考えて、一万年前の前後と見られる。その後奈良井川の下方浸食により段丘化したが、堆積の復活のため末端に当たるこの面は、沖積層により次第に埋没されることになった。奈良井川の沖積層の形成は、現在はん氷原は現河床附近に納まっているが、最近までいろいろな規模のはん氷の影響が及んでいる。小屋地籍の沖積層の内部にも、こん跡といえるN50°~60°Eの方向の河流跡が、ほ場整備中に多数見られた。

一方田川は、最初上流の塩尻市東西橋附近、後に塩尻市吉田と村井町の境附近を扇頂として沖積層を広げた。奈良井川と違い一部にわずかの小段丘を作ったが、専ら洪積層(面)と接觸あるいは

覆う形で堆積している。本発掘地でもJR線の東で洪積層との接触が観察出来た。地下50~60cmで観察出来た状態は、N50~68°Eの方向を示す洪積層の疊層の端に、明らかに田川水系の赤褐色の鉄分による汚染が見られた。汚染はNW40°の方向、幅2mの帯状を示し、接触面上に田川系統の安山岩や石英閃緑岩の跡を残している。

次に奈良井川と田川の沖積層の相互関係をみると、田川側の層内にある三層の礫層のうち、下の二層（深さ60cm、1m）は奈良井川の同深度の二層に対応し、大体同時の形成と考える。しかし田川側の上の二層（深さ30cm）に当たるものは奈良井川には見られない。また田川側の上層には礫層のほか、礫混りの土が多いが、奈良井川側には明らかに後のせぎとみられるほかは礫層、礫混り土は見当たらない。これは当時、河川による堆積が、奈良井川ではすでに納まっており、田川は継続中であったと考えられる。ただ中世以降、田川側も奈良井川側も広く開発が始まっているため、その影響は考慮にいれなければならない。

このような状況の中にあって、住居址や遺物が、深さ50~60cmで発見されたことは、この時期(平安末~中世)にはすでにこの深さ以下は安定した地層となっていたものと考えられる。遺跡が洪積面や奈良井川側に多かったのは、洪積面がわずかながら高まった地形面であり、また沖積面では奈良井川側の方が田川側より早く安定したためであろう。こんなところにも微地形的な形成の違いが分かる。



挿図 1 地層断面図



- | | | |
|--------|----------|---------|
| 1. 出川南 | 9. 小原 | 17. 清水林 |
| 2. 南原 | 10. 小屋 | 18. 石行 |
| 3. 竹洞 | 11. 村井 | 19. 横山 |
| 4. 向原 | 12. 若宮 | 20. 北原 |
| 5. 本郷 | 13. 吉田川西 | 21. 松山 |
| 6. 野瀬 | 14. 吉田内井 | 22. 小池 |
| 7. 百瀬 | 15. 赤木 | |
| 8. 高瀬 | 16. 原度前 | |

0 500 1000m

第2図 周辺遺跡

第3章 調査結果

第1節 調査の概要

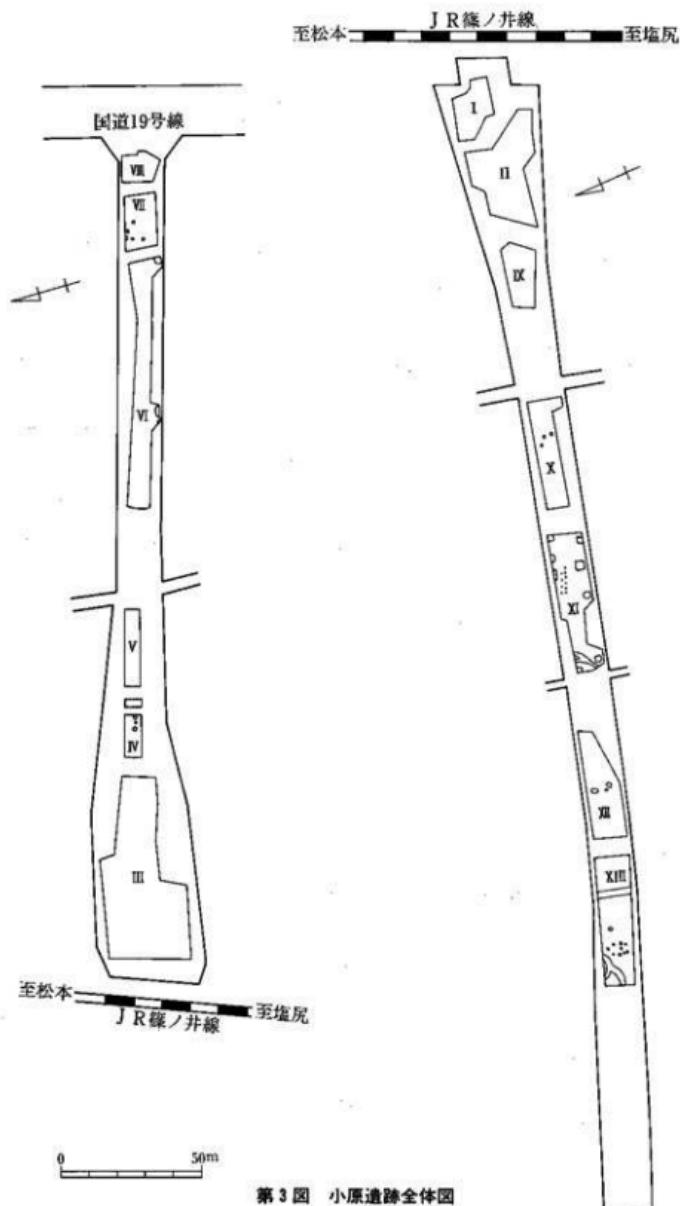
今回の調査地は、從来、小原遺跡と考えられていた範囲の東側地帯にあたる。このため、最初に遺構の分布状況、遺構面までの埋没状況を把握するため、1.5m四方の試掘坑を約50m間隔で設定した。この結果、主としてJR篠ノ井線附近から遺物が得られ、ここを中心として調査区I～XIII区を定めた。検出した遺構は竪穴住居址29軒、竪穴状遺構4基、掘立柱建物址3棟、柵列3棟、それらを除いたビット130基、土坑54基、溝址5本である。時期的にみると住居址は19軒が奈良時代末～平安時代前半、3軒が平安時代中頃、6軒が中世に属する。建物址は2棟が奈良時代末～平安時代、残る1棟と柵列3棟は中世に属すると考えられる。遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器等の土器陶磁器が見られ、中でも第15号住居址から出土した円面鏡は特記すべきものである。遺物よりみて本遺跡の主体となる時期は、奈良時代末～平安時代と、中世（13世紀～14世紀代）と考えられる。

第2節 周辺遺跡

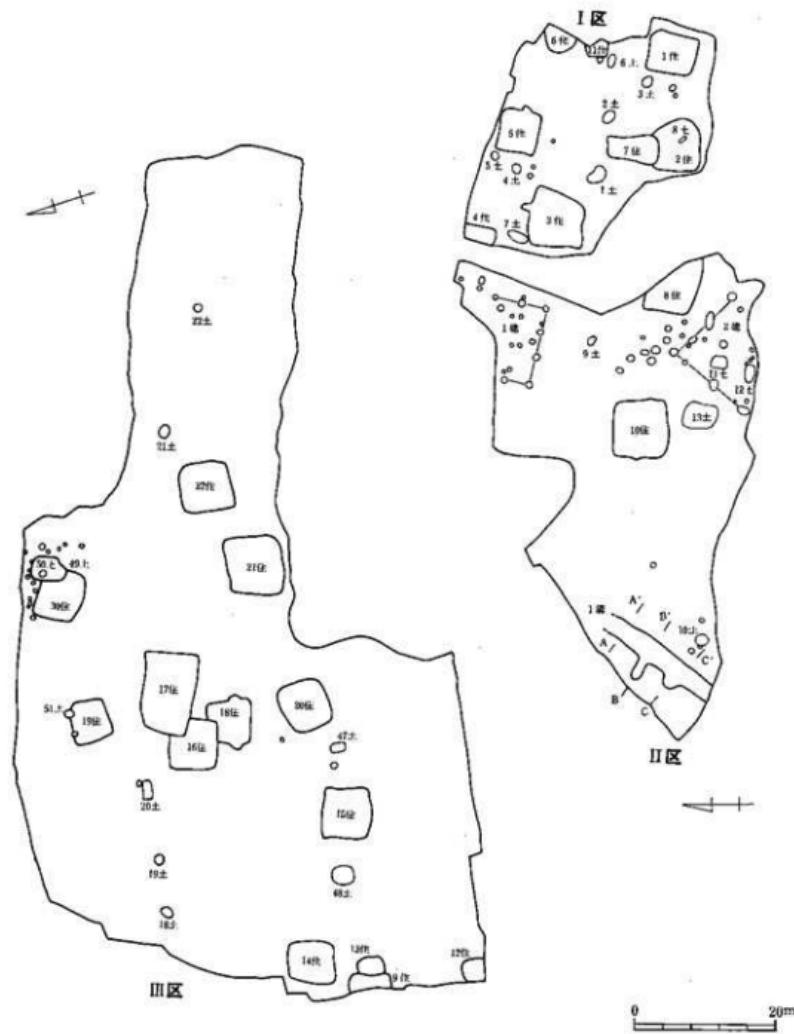
小原遺跡は、松本市南部の奈良井川と田川の中間に広がる芳川地区に位置する。地形的にみると、奈良井川の段丘が塩尻市側から延びてきて、芳川地区附近から不明瞭になり集落北側で消滅する。遺跡の多くは、この段丘上に分布している。以下、周辺遺跡の分布概要を記述する。

芳川地区東方を北に流れる田川の流域では、塩尻市側の右岸に吉田向井遺跡、左岸に吉田川西遺跡、若宮遺跡と続き縄文時代中期、弥生時代後期、平安時代の遺物が出土している。吉田川西遺跡は中央道長野線建設に伴い発掘調査され、奈良～平安時代にかけての大集落、及び中世の集落が確認され、土坑内から縄文陶器が出土するなど多数の遺物が出土したことで知られる。

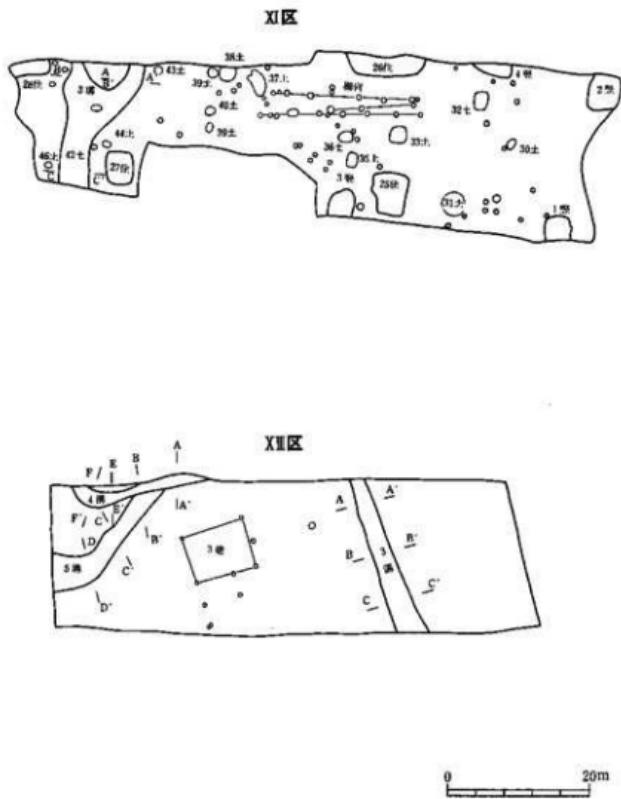
芳川地区では、西側の段丘直上にある小屋の集落と重なるように小屋遺跡がある。縄文土器および平安時代の土器が出土している。国道19号線の東側には高畠遺跡と村井遺跡がある。高畠遺跡は昭和61年度に松本市教委により発掘調査され、古墳時代末期及び奈良～平安時代の住居址3軒が確認されている。今回調査した小原遺跡は、芳川小学校の南側水田地帯とされていたが、JR篠ノ井線付近にも多くの遺構がみられた。このため遺跡の範囲は若干東側へ広がり、高畠遺跡と隣接する。また、本遺跡の南側には以前に寺があったと伝えられており、この寺に關係するものであろうか現在も石造物が残っている。



第3図 小原遺跡全体図



第4図 造構配置図(1)



第5回 遺構配置図(2)

第3節 遺構

1 横穴住居址

第1号住居址

本址は、調査I区南東隅に位置する。付近には北5m程のところに11住、西6mのところに2・7住が隣接する。本址は建て直しが見られ、旧住居址に貼床し、カマドを造り替えている。以下新・旧に分けて記述する。

①第1号新住居址

平面形状は、東西3.4m、南北4.0mの方形を呈し、主軸方向はN-75°-Eを指向する。覆土は黄褐色土粒を僅かに含む黒褐色粘質土である。床面は全体的に堅く良好であるが、南壁側は砂礫が混入しやや軟質である。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、残存高は東壁15cm、西壁10cm、南壁8cm、北壁9cmを測る。カマドは東壁北寄りに設けられた石組カマドである。主体部の左袖は抽石が立ったまま検出されたが、他のカマド石は火床内やカマド周辺に散乱していた。火床は床面より9cm程掘り進め、焼土層が5cm堆積していた。煙道部は検出されなかった。

遺物は須恵器壺・蓋・甕、土師器壺・甕等である。

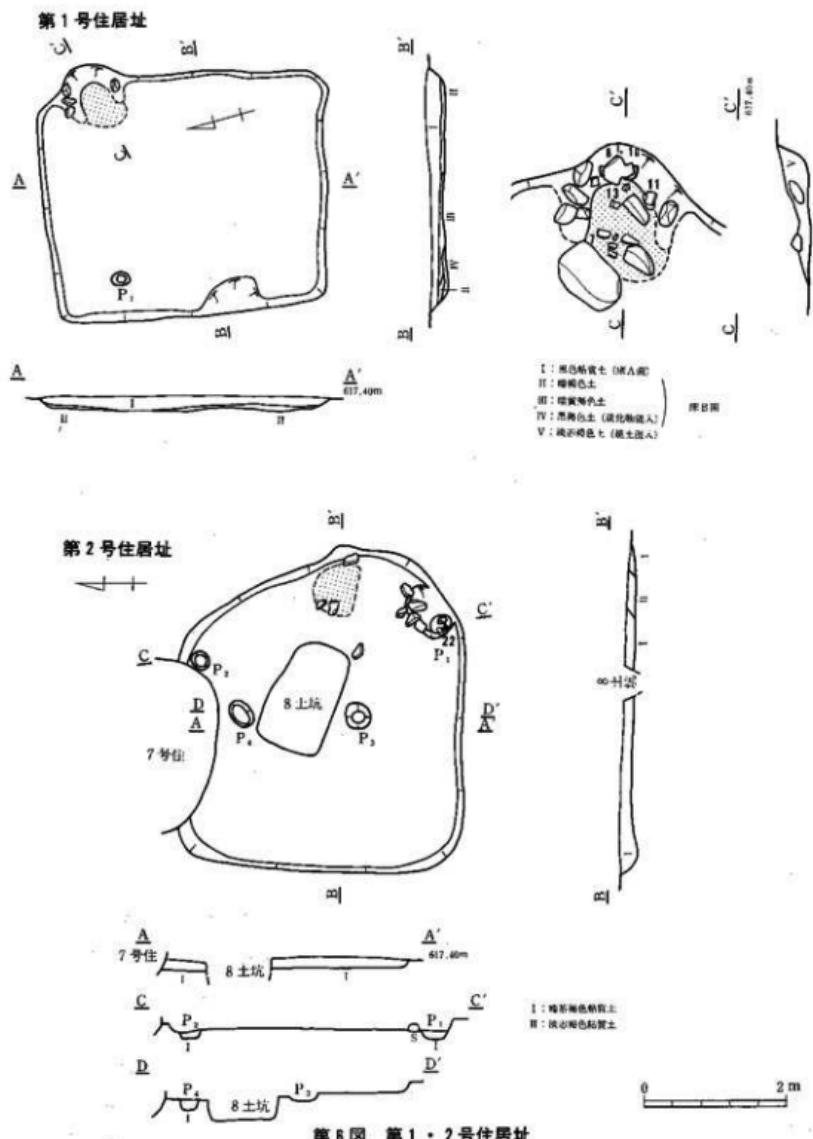
② 第1号旧住居址

平面形状・規模ともに新住居と共通である。主軸方向はN-45°-Wを指向する。旧住居は、床面が新住居に貼床され、カマドも破壊され造り替えられている。壁残存高は東壁19cm、西壁16cm、南壁10cm、北壁11cmを測る。床面は、南壁際と西壁南側が砂礫を多く含み軟質であるが、他は堅く良好である。カマドは西壁や南寄りに構築されていた。新住居建て替え時に破壊され、掘り込みが僅かに見られるのみではっきりしない。掘り込み内には炭、焼土が堆積し、焼土中からは土師器甕が出土した。煙道部は検出されなかった。

本址は平安時代前半～中頃に所属すると考えられる。

第2号住居址

本址は、調査I区南端中央部付近に7住および8土坑に切られて検出された。平面形状は、東西4.5m、南北3.9mの方形を呈し、主軸方向N-90°-Eを指向する。覆土は一層で黄褐色土粒を僅かに含む黒褐色粘質土である。壁はほぼ垂直で、残存高は東壁8cm、西壁22cm、南壁11cm、北壁10cmである。壁面、特に西・南壁には砂利が露出し、やや凹凸が見られる。床面は黄灰色を呈し軟質である。カマドは東壁中央部に設けられており、僅かに壁外へ張り出している。主体部は浅い窪みとなって僅かに焼土と炭が堆積する。ピットは東壁側南北にP1、P2、北壁中央部にP3、中央部やや南寄りにP4が確認された。このうちP1内より須恵器壺片、土師器壺片、僅かな小炭粒が検出され柱穴とは用途を異にするものと考えられる。



遺物は須恵器壺・蓋、土師器壺・甕、銭1点で、土器の多くはカマド及びその周辺から出土した。これらの遺物より、本址の帰属時期は奈良時代末～平安時代前半と考えられる。

第3号住居址

本址は、調査I区西側中央部に位置する竪穴住居址である。付近には北5mに4住、東5mに5住が隣接する。平面形状は、東西4.8m、南北4.7mの方形を呈し、主軸方向はN-13°-Eを指向する。覆土は一層で茶褐色粘質土である。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、残存高は東壁21cm、西壁11cm、南壁20cm、北壁11cmである。床面は黄灰褐色を呈し、中央部は堅くしまって良好である。壁際は軟弱であり、北壁及び東壁際は溝状に凹む。特にカマド付近は凹凸が見られる。カマドは北壁やや東寄りに位置している。構築材に使用したと思われる石が2個検出されたのみで、構造は不明である。ピットは北壁際東西にP1、P2、南壁中央部にP3、東壁中央部にP4が確認された。柱痕はいずれも検出されなかった。

遺物は須恵器壺、土師器壺・甕と刀子2点、帶金具1点が床面上より出土した。本址の帰属時期は、奈良時代末～平安時代前半と考えられる。

第4号住居址

本址は、調査I区北西隅に位置する竪穴住居址である。北側及び西側を調査区域外とするため、南東部四分の調査にとどまった。付近には東6mに5住が隣接する。平面形状は、方形を呈すると推定されるが、規模は不明である。覆土は一層で黄褐色土粒を僅かに含む茶褐色粘質土である。壁はほぼ平直で、残存高は東壁22cm、南壁26cmである。床面は黄灰褐色を呈し、壁際はやや軟質であるが、中央部は堅くしまって良好である。検出した床面上にはカマド、柱穴につながるものは皆無であった。

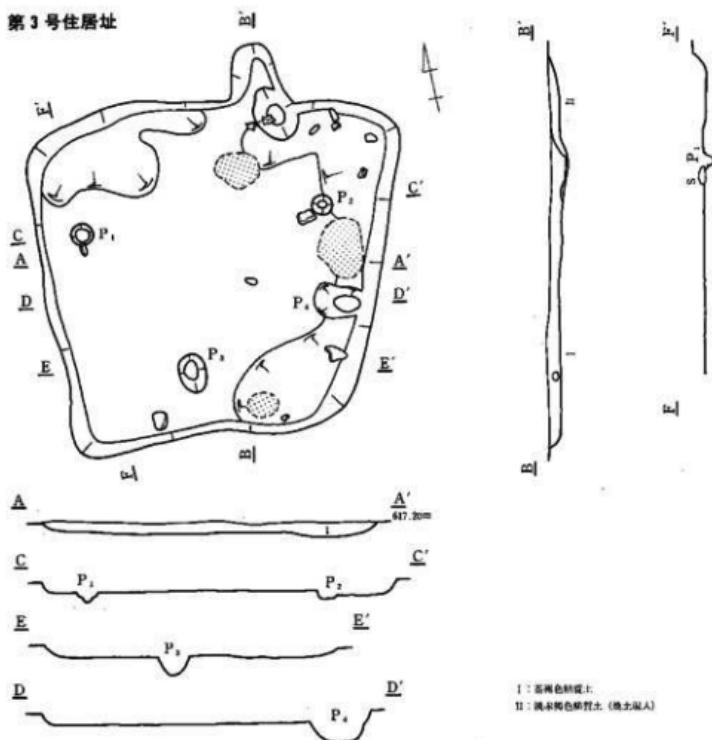
遺物は覆土中より須恵器壺、土師器壺が出土した。遺物の量が少なく時期決定は困難であるが、おそらく奈良時代末～平安時代前半に所属すると考えられる。

第5号住居址

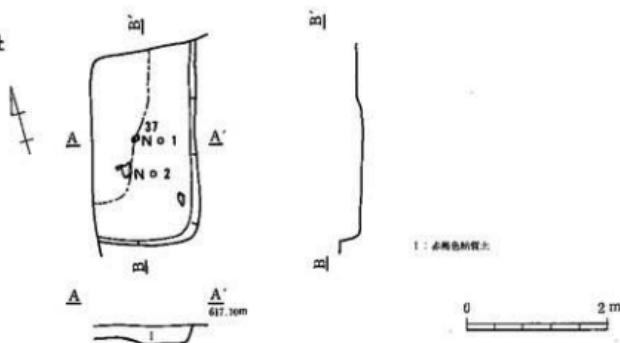
本址は調査I区の北端中央部に位置する。東側と南側に6m程の間をおいて6住、7住、南西約5mに3住、北西7mに4住が位置する。平面形状は、東西3.1m、南北3.7mの方形を呈し、主軸方向はN-105°-Eを指向する。覆土は一層で、黄褐色土粒をわずかに含む茶褐色粘質土である。壁はほぼ垂直で、残存高は東壁12cm、西壁15cm、南壁15cm、北壁5cmである。床面はほぼ平坦であるが、全体的に軟質である。カマドは、東壁やや南よりに位置しているが、火床内には焼土が5cm程堆積しており、土師器甕が焼土中より出土した。ピットは西壁南隅にP1のみが確認された。規模は長軸28cm、短軸21cm、深さ10cmを測り橢円形を呈する。内部は焼土が混入し、土師甕片が出土した。このような状況よりP1は柱穴ではなく、他用途として使用された可能性が高い。

遺物は須恵器壺・蓋、土師器甕、刀子である。遺物の量が少なく時期決定は困難であるが、おそらく奈良時代末～平安時代に帰属するものと考えられる。

第3号住居址

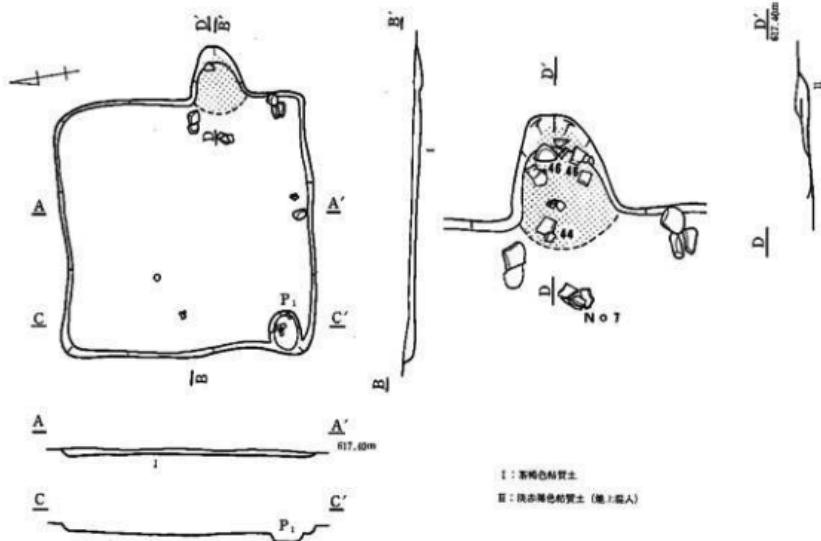


第4号住居址

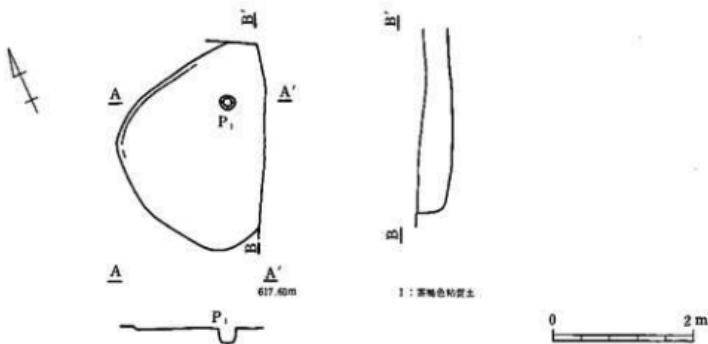


第7図 第3・4号住居址

第5号住居址



第6号住居址



第5図 第5・6号住居址

第6号住居址

本址は調査I区の北東隅に位置する。付近には西側6m程のところに5住、南側2m程のところに11住が隣接する。北側及び東側を調査区域外とするため約半分程の調査にとどまった。そのため平面形状・規模ともに不明である。本址を検出する際、全面的に削りすぎた為、壁の残存度が悪い。床面は茶褐色を呈し、堅くしまって良好である。覆土は調査区端で観察する限り暗茶褐色粘質土の単層である。カマドは確認されず不明である。ピットは中央やや北壁寄りにP1が検出された。規模は径20cm、深さ24cmであり、柱穴と考えられる。

遺物は、土師器壺、須恵器甕、灰釉陶器碗である。出土量が少なく、小片であるため時期決定は困難であるが、平安時代中頃と考えられる。

第7号住居址

本址は調査I区の中央部やや南寄りに位置する。2住の北壁を切るという重複関係がある。平面形状は東西2.4mの長方形を呈し、主軸方向はN-3°-Eを指向する。覆土は一層で黄褐色土粒をわずかに含む暗茶褐色粘質土である。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、残存高は東壁14cm、西壁19cm、北壁11cmである。壁面は小礫が露出しておりもろい。床面は軟質で黄灰褐色の砂礫が混じる。カマド及びピットは確認されなかった。なお住居址内には、大は30cmから小は拳大までの礫が、南半分を中心に多量に混入していた。

遺物は白磁皿片、石硯、鉄製品で時期は13世紀～14世紀代と考えられる。

第8号住居址

本址は調査II区東端やや中央寄りに検出された。付近には西10mには10住、北10mには1建がある。北西部約三割は調査区外に有り未発掘であるため規模、主軸方向ともに不明であるが、平面形状は方形を呈すと考えられる。覆土は一層で黄褐色土粒をわずかに含む暗褐色粘質土である。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれ、残存高は西壁18cm、南壁22cm、北壁19cmである。床面は、砂礫が多量に混入し軟質で、底面というのがふわしい。カマド及びピットは確認されなかった。

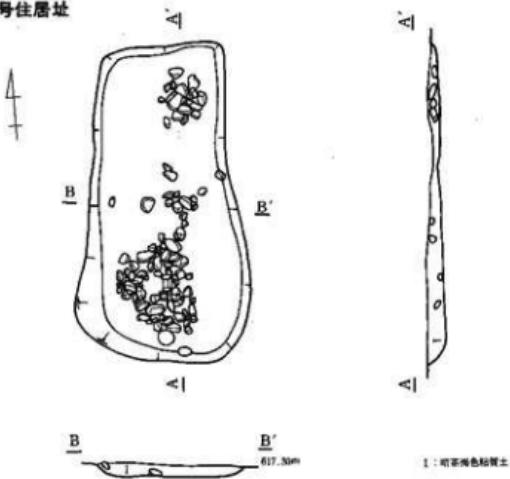
遺物は、覆土中より須恵器壺・蓋、土師器壺・甕、灰釉陶器平瓶がみられた。本址は、これらの遺物より見て、平安時代前半～中頃に帰属すると考えられる。

第9号住居址

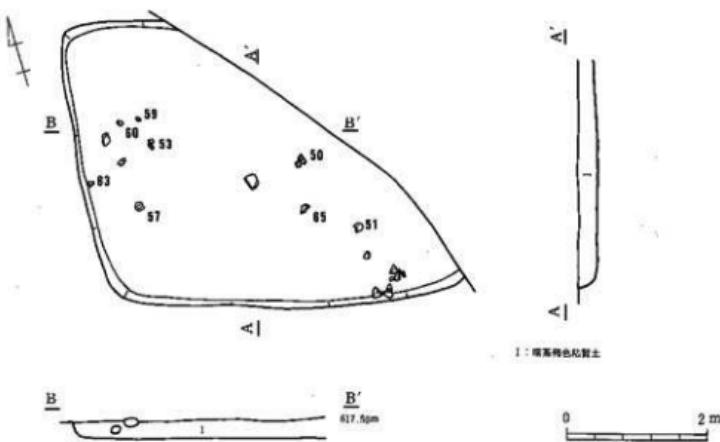
本址は調査III区最西端やや南寄りに検出された。本址の北東4mには14住、南7mには12住が位置する他、13住を切るという重複関係にある。本址は西半が調査区域外にはずれた為、規模、主軸方向、平面形状ともに明らかではない。覆土は、黒褐色砂質土の単層である。覆土中には、おそらく人為的に投入されたと思われる拳大～人頭大の礫が多量に混入していた。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、残存高は東壁5cm、南壁13cm、北壁4cmを測る。床面は軟質で、やや凹凸に富む。ピットは東壁際南隅にP1が位置するが、柱痕は検出されなかった。

遺物の出土はなく、また本址が切り込んでいる13住と併せて帰属時期は不明である。

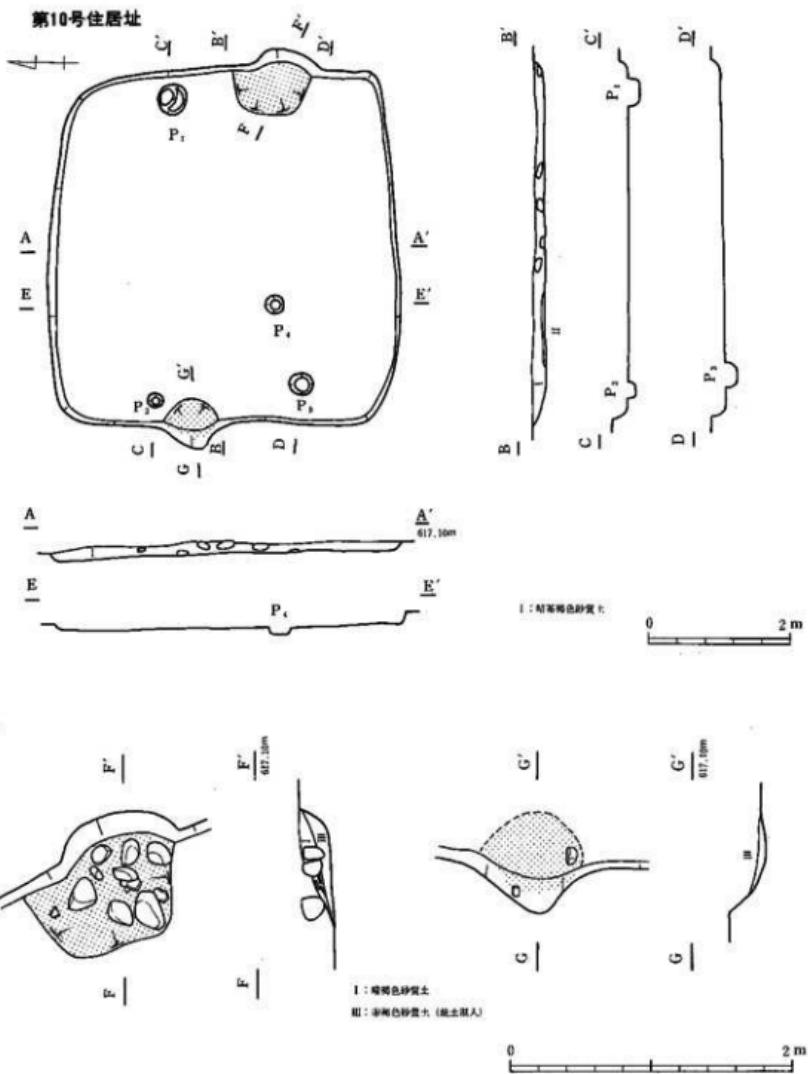
第7号住居址



第8号住居址

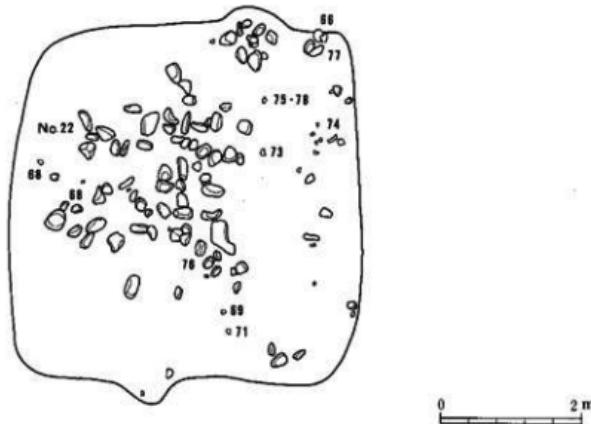


第9圖 第7・8号住居址



第10図 第10号住居址

第10号住居址遺物出土



第11図 第10号住居址遺物出土図

第10号住居址

本址は調査II区中央やや南寄りに位置し、東10mに8住、北東12mには1建が隣接する。平面形状は、東西5.9m、南北4.9mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-112°-Eを指向する。覆土は、拳大の礫が少數混入する暗褐色粘質土である。壁はややならかで残存高は東壁12cm、西壁19cm、南壁10cm、北壁11cmを測る。床面は中央部からカマド前にかけて堅くしまっている。ピットは4個検出された。床面北東寄りにP1、北西寄りにP2、南西寄りにP3、中央南西寄りにP4が位置する。主柱穴は位置的にみてP1・P2・P3と考えられる。カマドは、東壁やや南寄りと西壁中央付近の2箇所で検出された。西カマドからは構築材はほとんど検出されなかつたが焼土中から煮沸形態の土師器甕、供膳形態の須恵器坏が出土した。東カマドからは構築材として使用されたと思われる数点の石が火床に散乱した状態で検出された。火床は10cm程掘り産められており、そこに厚さ2cmの焼土層が形成されていた。東カマドと西カマドが同時に使用されたか、異なるかは明確にできなかつた。

遺物は、須恵器坏・蓋、土師器甕、鉄滓数点が見られる。遺物からみて奈良時代末～平安時代前半に帰属すると考えられる。

第11号住居址

本址は調査Ⅰ区最東端中央に位置する。本址の北3mには6住、南6mには1住が隣接する。東側の大半が調査区域外にある為、規模、主軸方向、平面形状とともに明らかではない。また、掘込みが浅かった為と重機削平により遺存状況は悪い。覆土中には拳大から人頭大までの石が多数混入しており、調査当初は集石造構として扱っていた。床面は茶褐色を呈し、平坦で堅く良好であった。壁はほぼ垂直である。カマドおよびピットは検出されなかった。

遺物の出土はなく、本址の帰属時期は不明である。

第12号住居址

本址は調査Ⅲ区南西隅に位置する。付近には北9m程のところに9住、13住が位置する。本址の西側及び南側は調査区域外にあたり、北東部約4割の調査にとどまった。平面形状は仔細を欠くが、方形を呈すると推定される。覆土は一層で黒褐色砂質土である。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており残存高は東壁6cm、北壁9cmを測る。床面は軟弱で黄褐色粘質土を呈する。カマド及びピットは検出されなかった。

遺物は、銭貨1点（景定元宝：初鑄年1260年）が床面上より出土したのみで、本址の所属時期は不明である。

第13号住居址

本址は調査Ⅲ区西側中央やや南寄りに検出された。付近には北4mに14住、東13mには15住が隣接する。9住に西側半分を切られる為、規模、主軸方向ともに不明であるが平面プランは方形を呈すると推定される。覆土は一層で暗褐色砂質土を呈する。壁はなだらかに立ち上がり、残存高は東壁19cm、南壁19cm、北壁14cmを測る。床面は軟質で黄褐色粘質土を呈する。南側床面上に炭化物がわずかに検出された。カマド及びピットは検出されなかった。

遺物は、土師器小片、灰釉陶器小片の2点が出土したのみであるため、本址の帰属時期は不明である。

第14号住居址

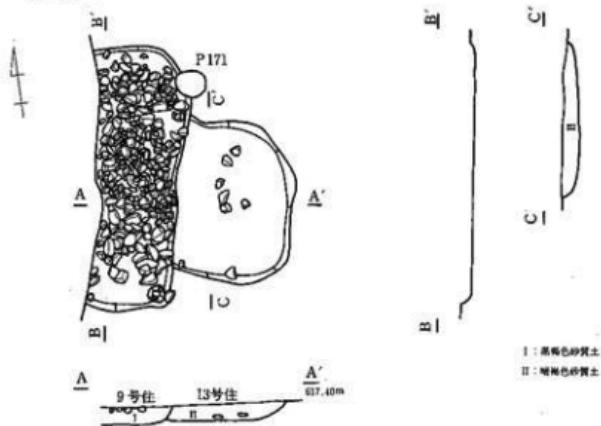
本址は調査Ⅲ区西側中央に検出された。付近には南に9、13住が隣接する。平面形状は、東西3.6m、南北4.1mの隅丸方形を呈し、主軸はN-107°-Eを指向する。本址の北側は耕作による削平を受け、西側は搅乱により破壊されている。覆土は一層で黒褐色砂質土である。壁はなだらかに立ち上がり、壁面は拳大程の礫を多量に含むが後世の削平を受け遺存状況は悪い。床面は軟質で小礫が混入する黄褐色粘質土を呈する。カマド及びピットは検出されなかった。

遺物は、山茶碗と鉄製品のみで時期決定は困難である。

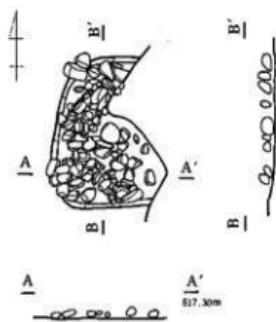
第15号住居址

本址は調査Ⅲ区中央やや南西寄りに検出された。付近には東8mに20住、西10mに9・13・14住の一群が接する。平面形状は、東西4.3m、南北4.4mの方形を呈し主軸はN-77°-Wを指す。

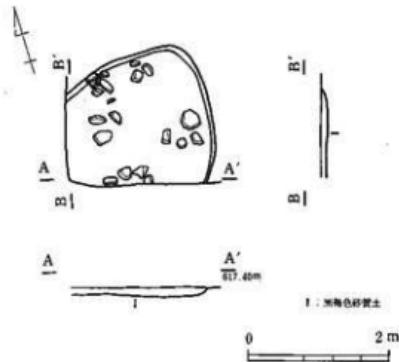
第9・13号住居址



第11号住居址

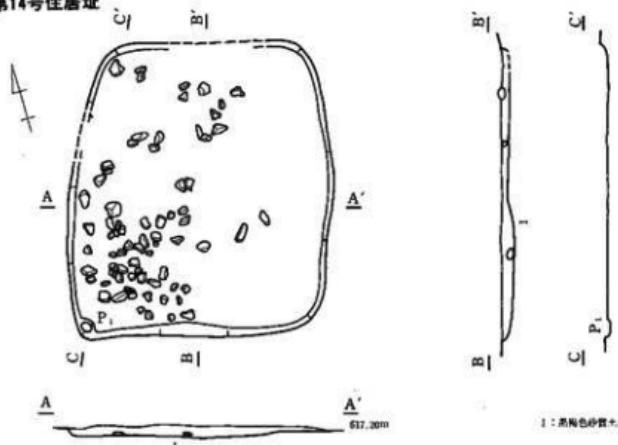


第12号住居址



第12図 第9・11~13号住居址

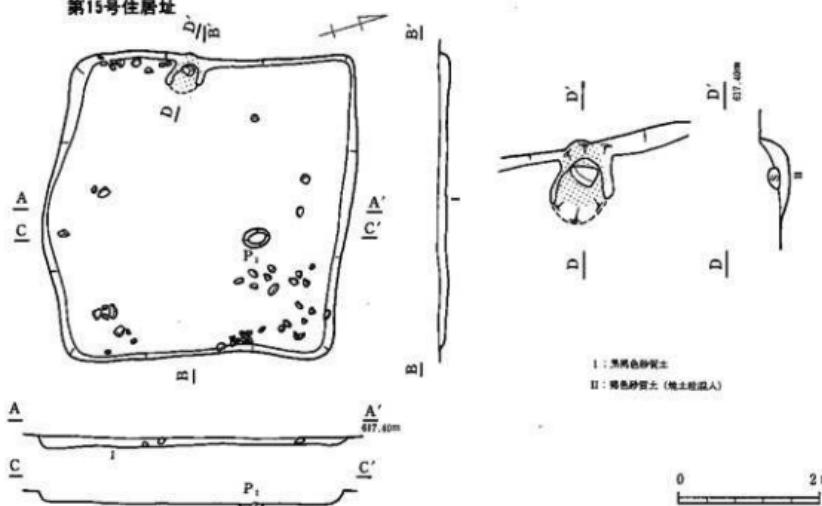
第14号住居址



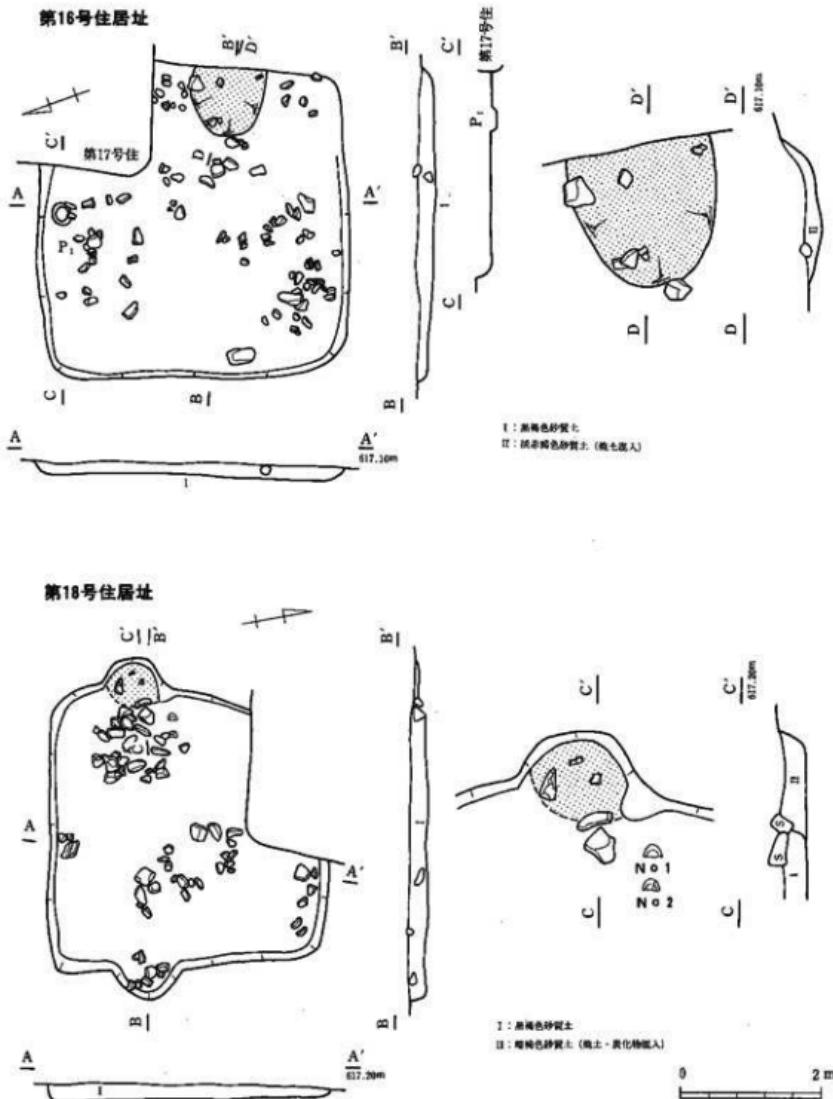
I : 黑褐色砂質土

II : 褐色砂質土 (地土輕透入)

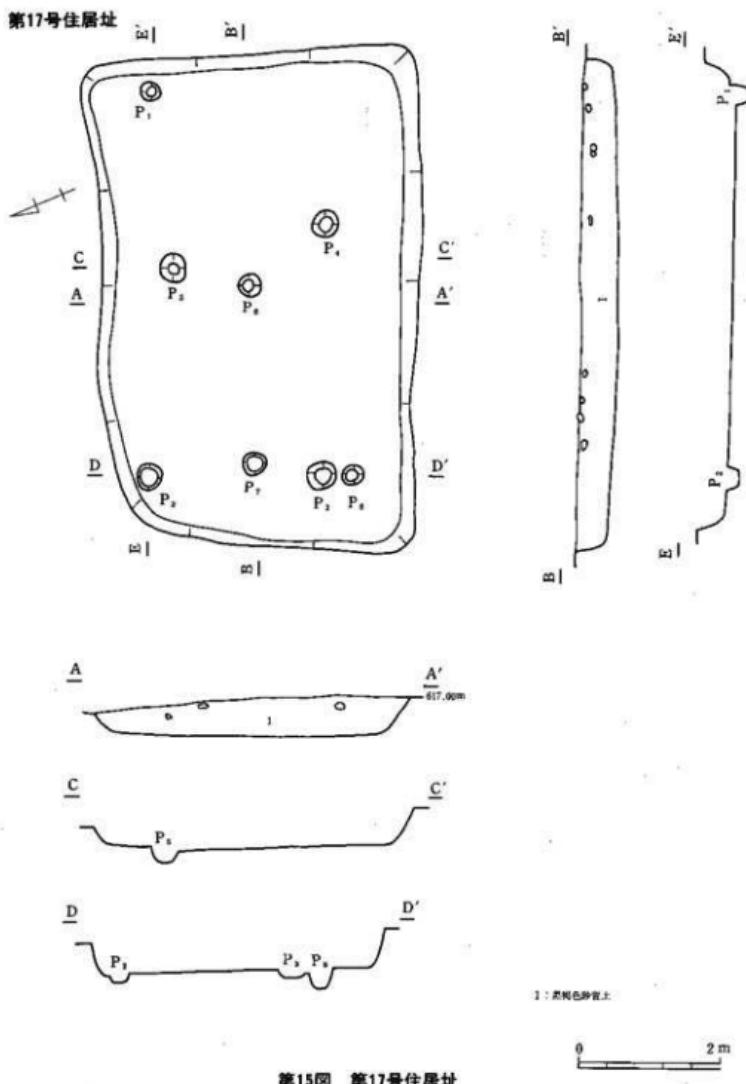
第15号住居址



第13図 第14・15号住居址

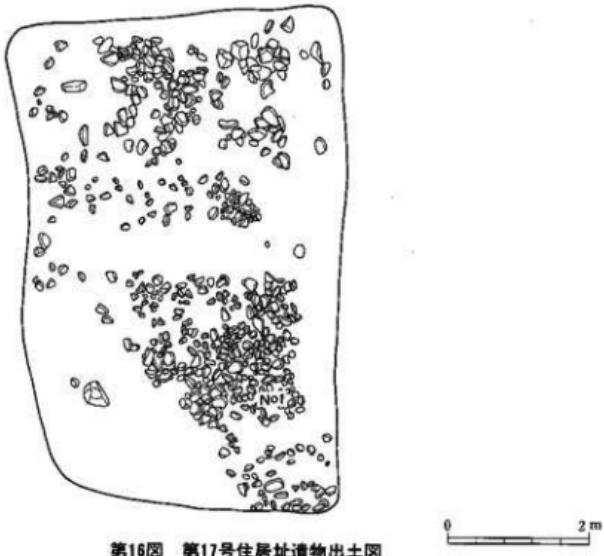


第14図 第16・18号住居址



第15図 第17号住居址

第17号住居址遺物出土



第16図 第17号住居址遺物出土図

覆土は黒褐色砂質土の單一層である。壁は南壁がややなだらかに立ち上がるが他はほぼ垂直に立ち上がる。壁残存高は東壁8cm、西壁15cm、南壁17cm、北壁17cmを測る。床面は軟質で、拳大の礫が多く露出し、底面というのがふさわしい。ピットは床面中央やや北東よりに1個検出された。カマドは西壁中央部に位置すると考えられるが、主体部の浅い落ち込みと焼土が確認されたのみである。

遺物は、須恵器壺・円鏡、土師器壺、砥石が覆土中より出土している。これらの遺物からみて本址は奈良時代末～平安時代前半に帰属すると考えられる。

第16号住居址

本址は調査III区中央やや西寄りに検出された。東側を17住に切り込まれ、南東側で18住を切り込んでいる。付近には北10mに19住、南7mに20住が隣接している。平面形は、東西4.4mの規模をもつ方形プランで主軸はN-115°-Eを指向する。覆土は暗褐色粘質土の一層のみである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、残存高は東壁17cm、西壁21cm、南壁19cm、北壁19cmを測る。床面は軟質で黄褐色土を呈する。床面上には拳大～人頭大の礫が広く散乱して遺存していた。ピットは、本址北側中央に1個検出された。カマドは東壁やや南寄りに位置している。

遺物は、須恵器壺・蓋が出土している。これらの遺物よりみて本址は奈良時代末～平安時代前半に帰属すると考えられる。

第17号住居址

本址は調査III区中央やや西寄りに検出された3軒(16、17、18住)の重複した住居址群中の北側に検出された。南西隅は16住を切り込んでいる。主軸はN-110°-Eを指し、平面形は東西(長軸)7.1m、南北(短軸)4.8mの長方形を呈するプランである。覆土は黒褐色砂質土の一層であり、覆土中には人為的に投入されたと思われる拳大～人頭大の礫が多量に混入していた。分布範囲は、ほぼ全域にわたって広がっているが、北東隅から南西隅にかけて特に濃密に集中していた。壁はほぼ垂直に立ち上がり、残存高は東壁40cm、西壁30cm、南壁51cm、北壁27cmを測る。床はほとんど凹凸はないが堅さは全く感じられず、底面というのがふさわしい。東側中央部には、少量の炭化した材片が見られた。住居に伴う施設は、カマドは検出されずビットが8個検出された。ビットは位置的に8個すべて柱穴と考えられる。

遺物は、土師器壺、須恵器壺・蓋、灰釉陶器破片、鉄釘6点が見られた。これらの遺物よりみて本址は、平安時代前半～中頃に帰属すると考えられる。

第18号住居址

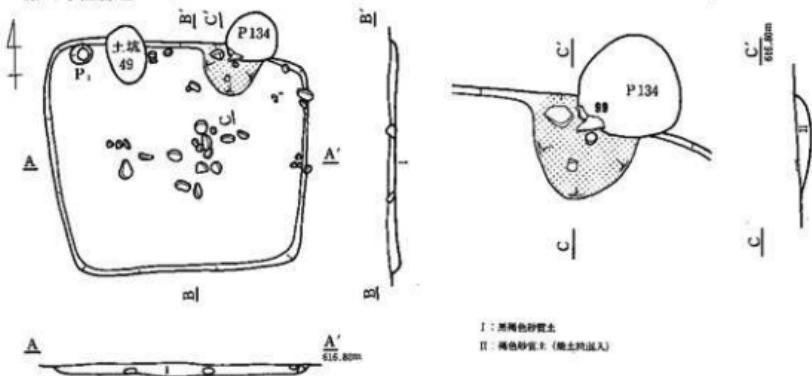
本址は調査III区中央やや西寄りに検出された3軒(16、17、18住)の重複した住居址群中の南側に検出された。北西隅は16住を切り込んでいる。平面形は東西4.0m、南北4.0mの方形で主軸方向はN-80°-Wを指向する。覆土は黒褐色砂質土の一層である。ほぼ垂直に立ち上る壁は、東壁26cm、西壁16cm、南壁25cm、北壁20cm残存している。床面は全体的に軟質であり、ビット等の施設は認められなかった。カマドは西壁やや南寄りに設けられた石組粘土カマドである。粘土部は、ほとんど崩れ落ちており、石組も遺存状態が悪い。南側の袖石のみ残存しておりカマド前部には、カマド石が散乱した状態で検出された。以上のような状況より人為的にカマドが破壊された可能性が認められる。火床部は少し掘り窪められ炭化物、焼土が2cm程堆積している。

遺物は、須恵器壺、土師器壺・壺である。出土量が少なく時期の決定は難しいが、奈良時代末～平安時代前半に帰属すると考えられる。

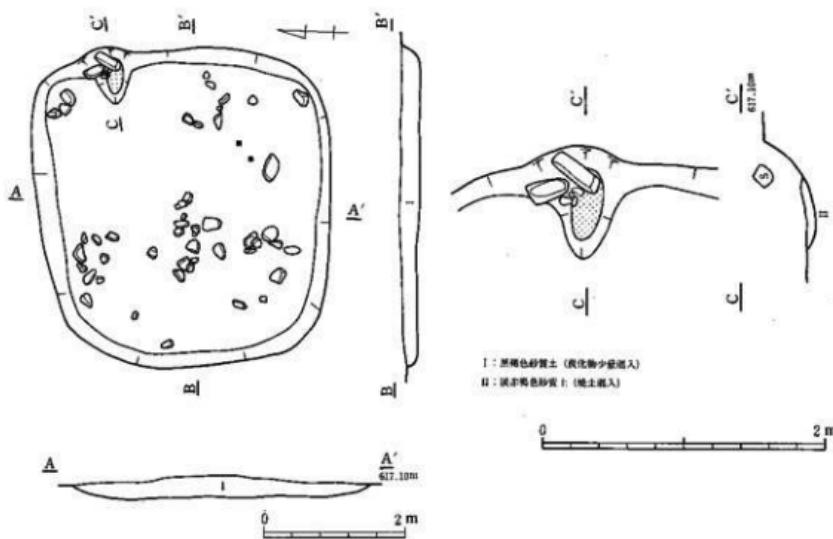
第19号住居址

本址は調査III区中央北端際で検出された。本住居址の東約7mには29住、南約5mには16、17、18住の一群が位置する。北壁東側はP134に切られている。平面形状は方形で、規模は東西3.7m、南北3.2mを測る。主軸方向はN-5°-Wを指向する。覆土は単層であり、小礫を僅かに含む黒褐色砂質土である。壁は僅かに残存するのみであり、東壁6cm、西壁10cm、南壁11cm、北壁6cmを測る。残存部の状況より南壁がややなだらかに立ち上がる他は、ほぼ垂直に立ち上ると推定される。床面は南側が僅かに高くなっている、地山を床としているため全体的に軟質である。住居に伴うビットは、床面上で1個検出された。カマドは北壁やや東寄りに位置すると考えられる。P134に切られているため遺存状況は悪く、主体部と思われる4cmほどの浅い落ち込みに僅かに焼土が堆積しており、カマド構築材は見られなかった。焼土中より土師器壺が出土した。

第19号住居址



第20号住居址



第17図 第19・20号住居址

遺物は、土師器坏、須恵器蓋であり、本址は奈良時代末～平安時代前半に帰属すると考えられる。

第20号住居址

本址は調査III区中央やや南寄りに位置する。付近には北5mに16、17、18住の一群、西7mには15住、東9mに21住が隣接する。平面形状は、東西4.4m、南北4.1mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-80°-Eを指向する。覆土は単層であり、炭粒を僅かに含む黒褐色土層である。壁はややなだらかに立ち上がり、残存高は東壁30cm、西壁20cm、南壁17cm、北壁14cmを測る。床面はほぼ平坦であり地山を床としているため全体的に軟質である。ピット等は確認されなかった。カマドは東壁やや北寄りに位置する。遺存状態は悪く、本カマドには数点の石が残存し、火床からは僅かな焼土が検出された。

遺物は、土師器坏・塊、須恵器坏、北壁際やや西寄の床面上から炭化したアワの種子が出土した。本址の帰属時期は平安時代前半～中頃と考えられる。

第21号住居址

本址は調査III区中央付近に位置する。付近には東5mに22住、西9mに20住、北西12mに16、17、18住の一群が隣接する。平面形状は方形を呈し、規模は東西5.3m、南北4.9mを測る。主軸方向はN-105°-Eを指向する。覆土は単層としてとらえられ、砂礫を多く含む黒褐色砂質土が堆積している。壁は僅かに残存するのみである。床面は地山の疊（5cm～10cm大）混入黄褐色土を床とし、全体的に凹凸を持ち軟質である。ピットは検出されなかった。カマドは東壁やや南寄りに位置した石組粘土カマドであり、その主体部は片割の袖の粘土と数個の石が残存するのみである。火床部は少し掘り窪められ、焼土、炭化物が5cmほど堆積していた。

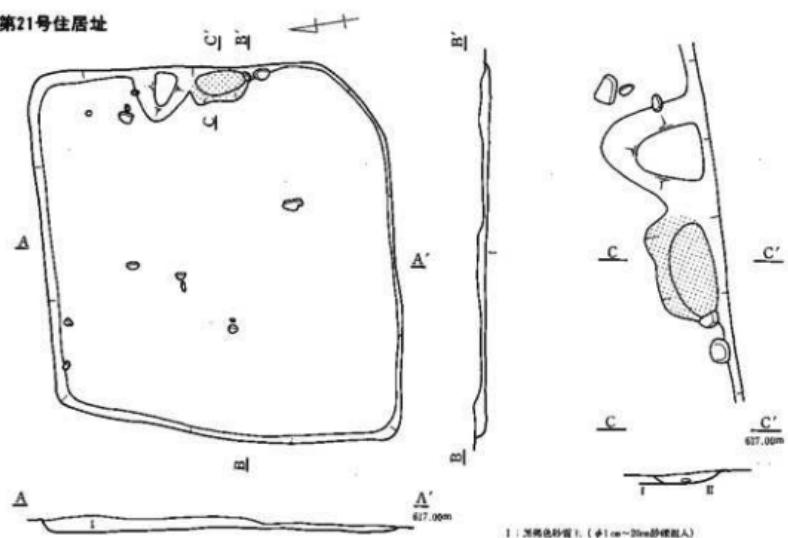
遺物は、須恵器坏・蓋、土師器甕である。出土量が少なく時期決定は難しいが、奈良時代末～平安時代前半に比定されよう。

第22号住居址

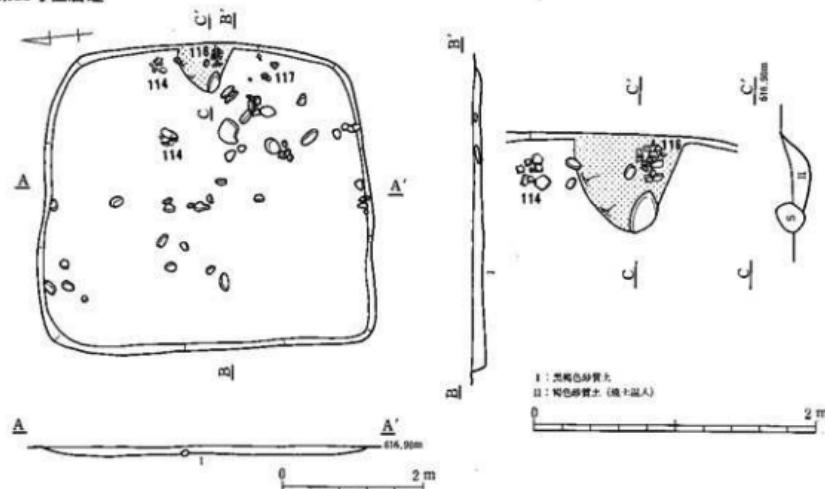
本址は調査III区東側中央に検出された。付近には西6mに21住、北西12mに29住が隣接する。平面形状は、東西4.3m、南北4.8mの方形を呈し、主軸はN-95°-Eを指向する。覆土は単層で砂礫を多く含む黒褐色砂質土が堆積している。壁は僅かに残存し、東壁8cm、西壁18cm、南壁13cm、北壁7cmを測る。本址は、砂礫を多量に含む黄褐色土中に掘り込まれているため、壁面や床面には多量の砂礫が露出している。床面はほぼ平坦で、全体的に軟質である。ピット等は検出されなかった。カマドは東壁中央に位置する。遺存状態は悪く、火床内及びカマド周辺に火を受け焼けただれた痕跡の見える礫が散乱し焼土が堆積していた。その上面には土師器甕が遺存していた。

遺物は、須恵器坏・長頸壺、土師器甕である。これらの遺物から本址は奈良時代末～平安時代前半に位置づけられる。

第21号住居址

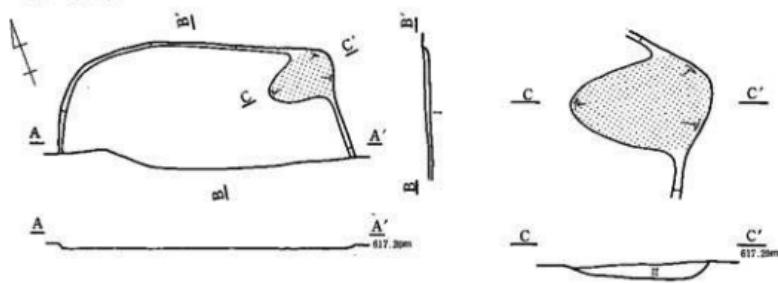


第22号住居址



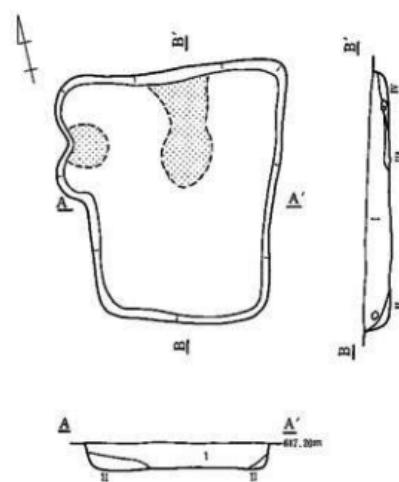
第18図 第21・22号住居址

第23号住居址



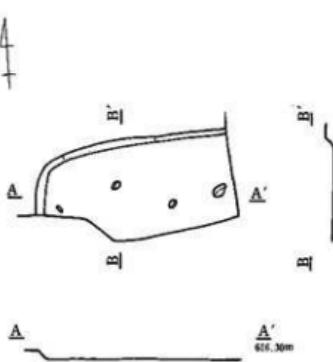
I: 墙面褐色粘土
II: 墙面褐色粘土上(灰土混入)

第25号住居址



I: 黑褐色粘土
II: 黑褐色砂砾
III: 暗灰褐色粘土(炭化物混入)
IV: 暗赤褐色砂质土(灰土混入)

第24号住居址



0 2 m

第19图 第23~25号住居址

第23号住居址

本址は調査VI区中央南端に位置する。付近には東50mに24住が位置する。南側約半分が調査区域外にのびているため、平面形状は不明である。主軸はN-63°-Eを指向し、規模は東西4.1mを測る。本址を検出する際、全面的に削りすぎた為、壁の遺存度が悪い。床面は、堅くしまって良好であり、覆土は暗茶褐色粘質土の単層である。カマドは、北東角に位置したものと考えられるが、遺存状態が悪く、火床と思われる落ち込みと、若干量の焼土が検出されたのみである。ピット等の施設も検出されなかった。

遺物の出土もなく、本址の所属時期は不明である。

第24号住居址

本址は調査VI区南東端に位置する。南側及び東側の約7割を調査区域外としているため、四半部のみの調査となった。平面形状、規模、主軸方向ともに不明である。覆土は暗茶褐色粘質土の単層である。壁の遺存状況は悪くほとんど残存せず不明である。床面は、やや軟質であるが、ほぼ平坦である。カマド及び柱穴は検出されなかった。

遺物は1~2cm大の須恵器、土師器の小片2点が出土したのみであり、所属時期は不明である。

第25号住居址

本址は調査XI区南端中央部に位置する。西4mに第3号竪穴状遺構、北10mに26住が隣接する。平面形状は東西3.2m、南北3.6mの不整形方を呈し西側には張り出しが見られる。主軸方向はN-150°-Eを指向する。覆土は、四方から住居址中央部に向けて流れ込んだ自然堆積の様相を示している。灰褐色砂礫層と灰褐色砂質土の二層に分けられる。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、東壁33cm、西壁32cm、南壁36cm、北壁39cmを測る。床面はほぼ平坦で堅さは全く感じられず、床とするよりは底面とするのが適当であろう。北壁中央及び西壁の張り出し付近の2箇所に焼土、炭の散布が認められるが、カマドとしての施設は整っていない。ピット等は検出されなかった。

遺物の出土はなく時期は不明である。

第26号住居址

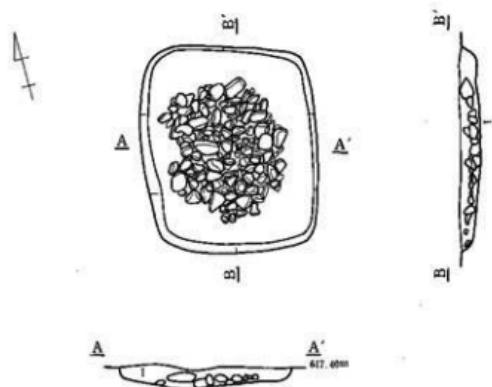
本址は調査XI区北端中央付近に位置し、本址の東5mに第4号竪穴状遺構が位置する。平面形状は、半分程が調査区外へ延びており細部を欠くが、長方形を呈すると推定される。規模は東西6.8mを計測する。覆土は、暗灰褐色砂質土の単層である。壁は灰褐色砂質土をほぼ垂直に掘り込み、東壁15cm、西壁11cm、南壁21cmを測る。床面は平坦であるが軟質であり、堅さは見られない。ピット、カマド等の施設は検出されなかった。

遺物は非常に少なく、1~2cm大の土器片2点が出土したのみであり時期は不明である。

第27号住居址

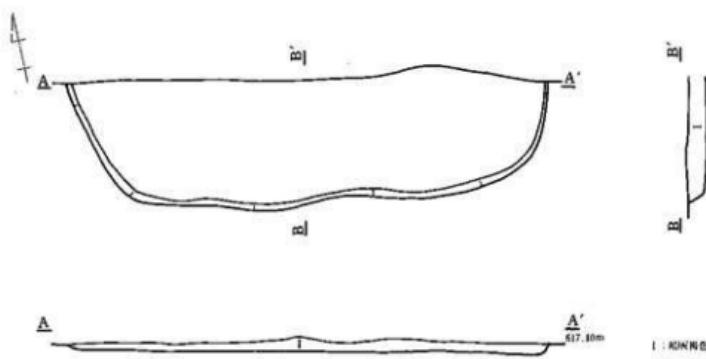
本址は調査XI区南西端付近に位置し、北西10mには28住が隣接する。平面形状は、東西1.2m、南北2.9mの方形を呈し、主軸方向はN-10°-Eを指向する。覆土は暗灰褐色砂質土の単層であるが中

第27号住居址



I: 厚灰褐色砂質土

第28号住居址



I: 厚灰褐色砂質土

0 2 m

第20図 第26・27号住居址

央部の検出面から床面までは、拳大から人頭大の礫が多量に混入していた。そのあり方からすると、自然埋没とは言い難い。床面は中央部が低く、堅さは全く見られない。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、東壁17cm、西壁23cm、南壁18cm、北壁19cmを測る。付属施設、遺物等はみられなかった。本址は住居址とするよりも竪穴状遺構とする方が妥当であるかもしれない。

第28号住居址

本址は調査II区北西隅に位置している。北側及び西側を調査区域外とし、詳細は不明であるが概形は方形と推定される。覆土は暗灰褐色砂質土の単層である。壁はややなだらかに掘り込まれ、東壁21cm、南壁22cmを測る。床面は軟質で、地山の灰褐色砂質土（5cm～10cm大の小礫多量に混入）であり、床とするより底面と言うのが適当である。付属施設は検出されなかった。

遺物は、古瀬戸系おろし皿1点のみであり、本址の帰属時期は不明である。

第29号住居址

本址は調査III区北側中央寄りに検出された。付近には西10mに19住、南15mに21住、南東13mに22住、南西14mに16、17、18住の一群が位置する。また54、55土坑に北東隅を切られるという重複関係にある。平面形状は、東西3.8m、南北4.5mの方形を呈し、主軸はN-131°-Eを指向する。覆土は炭、砂礫が混入する黒褐色砂質土の単層である。壁はややなだらかに立ち上がるが、遺存状況は悪い。地山を床とし、砂礫が多く露出しており、全体に軟質である。本址南東部の床面上からは炭が多量に検出された。カマドは検出されなかったが、ピットは6個検出された。このうちP4は54土坑内にあるが、29住床面レベルより掘り込まれており、深さも他のピットと共通することなどから29住に付属するピットであると判断した。主柱穴はP3～P6の4本であると考えられる。

遺物は、須恵器壺・甕、鐵鎌2点、不明鉄製品1点が出土している。出土量が少ないため、時期決定は困難である。

2. 竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構

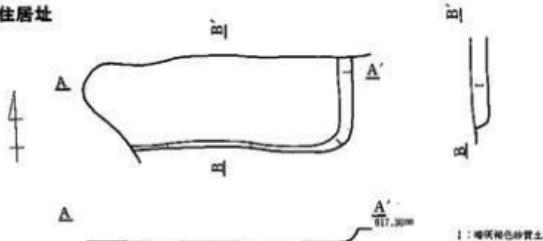
本址は調査II区の南東端の灰褐色砂質土上で約7割が検出された。北東12mに2層、西13mに25住が位置する。3割が調査区外にあるため規模は不明であるが、平面形状は長方形を呈すると推定され、主軸方向はN-0°を指向する。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれ東壁15cm、西壁15cm、北壁12cmを測る。底面は、ほぼ平坦であり灰褐色砂質土で軟質である。ピットは、北壁中央や西寄りにP1が検出された。拳大～人頭大の礫を数個含み、炭を僅かに含む暗灰褐色砂質土であった。

遺物の出土はなく、本址の帰属時期は不明である。

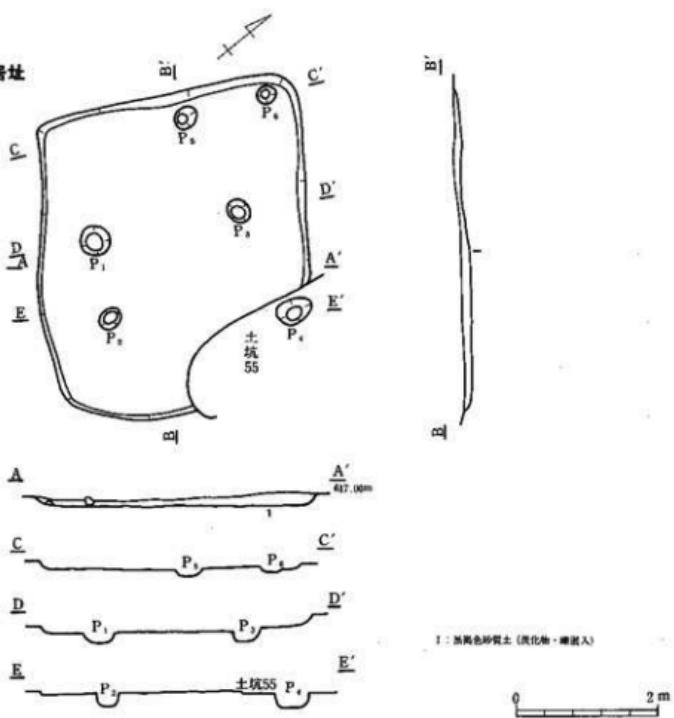
第2号竪穴状遺構

本址は調査II区の北東端で約7割が検出された。南東部を搅乱により壊されており、約4割は調査区外にあり未調査である。西9mに4竪、南西12mに2竪が位置する。規模は、全貌が明らかでないため不明である。平面形は不整長方形を呈する。主軸方向はN-20°-Eを指向する。壁は、ほ

第28号住居址

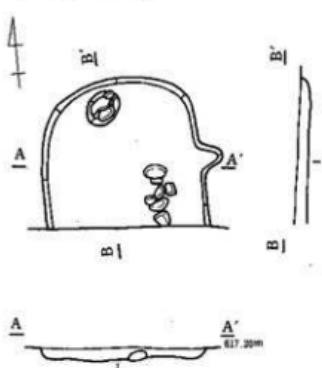


第29号住居址

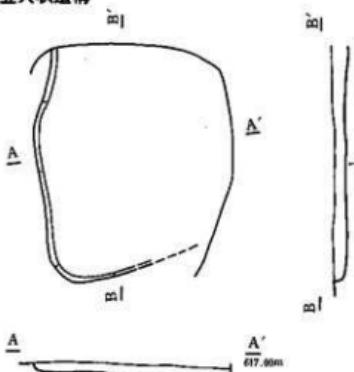


第21図 第28・29号住居址

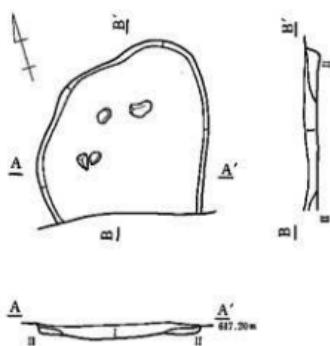
第1号竖穴状造構



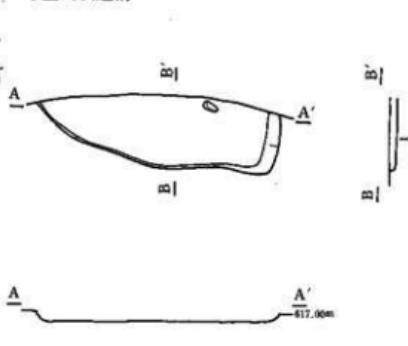
第2号竖穴状造構



第3号竖穴状造構



第4号竖穴状造構



等大状造構某木七層
I : 暗紅褐色砂質土
II : 暗灰茶褐色砂質土

0 2 m

第22図 竖穴状造構

は直で、残存高は東壁14cm、西壁22cm、南壁20cmを測る。底面は、砂礫が所々に露出し凹凸に富む。ピット及びその他の施設は検出されなかった。

遺物は、土師質土器片、短刀、刀子が出土した。本址は13世紀代に帰属すると考えられる。

第3号竪穴状造構

本址は調査II区中央南端付近に位置する。南側約2割が調査区外にあり未調査である。東4mに25住、北13mに26住が隣接する。規模は東西2.3m、平面形は不整長方形を呈し、主軸方向はN-20°-Eを指す。覆土は、暗灰褐色砂質土の単層である。壁は直に掘り込まれ、残存高は東壁13cm、西壁15cm、北壁19cmを測る。底面は、中央部に向けてゆるやかに傾斜している。全体的に軟質であり、床という感じは全く見られない。

遺物は、全く見られず、本址の帰属時期は不明である。

第4号竪穴状造構

本址は調査II区中央やや東寄り北端に検出された。北側約7割が調査区外にあるため南側約3割の調査にとどまった。東側7mに1竪、西側5mに26住が隣接する。平面形状は不整長方形を呈するものと考えられるが、規模等については仔細を欠く、壁は東壁がややなだらかで、南壁が垂直に掘り込められている。底面は軟質であり、床という感じは見られない。

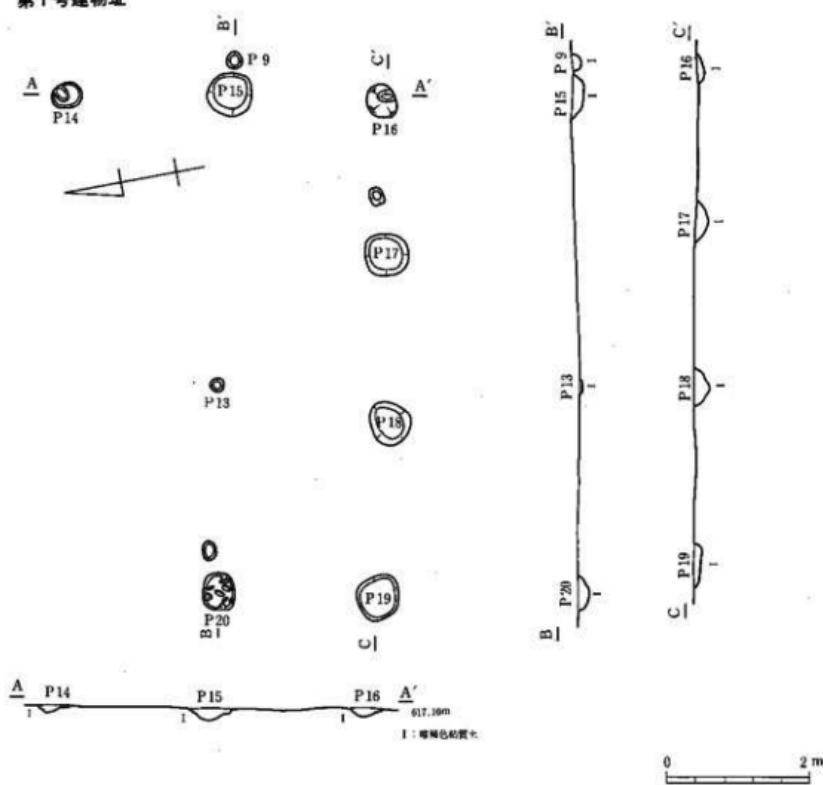
遺物の出土はなく、本址の帰属時期は不明である。

3. 建物址

建物址は計3棟検出した。このうち第1号・第2号建物址（以下、○建と略す）は、ピットを数多く検出した調査II区に位置する。1建は、北西部端が調査区域外にあたり全様は明らかにできなかった。平面形態は桁行3間×梁行2間の側柱式で、すべての柱穴がやや開いたU字状を呈する。遺物は、P18内より須恵器蓋が出土している。2建は、桁行3間×梁行3間の側柱式を呈しており、柱穴はどれもU字状に掘り込まれている。P52とP61は位置的にみて支柱的存在であろう。本址からは灰釉陶器の小片が出土した。3建は、本遺跡最西端の調査III区に位置している。ピットの規模・形態とともに貧弱であるため、建物とは性格を異にする可能性がある。

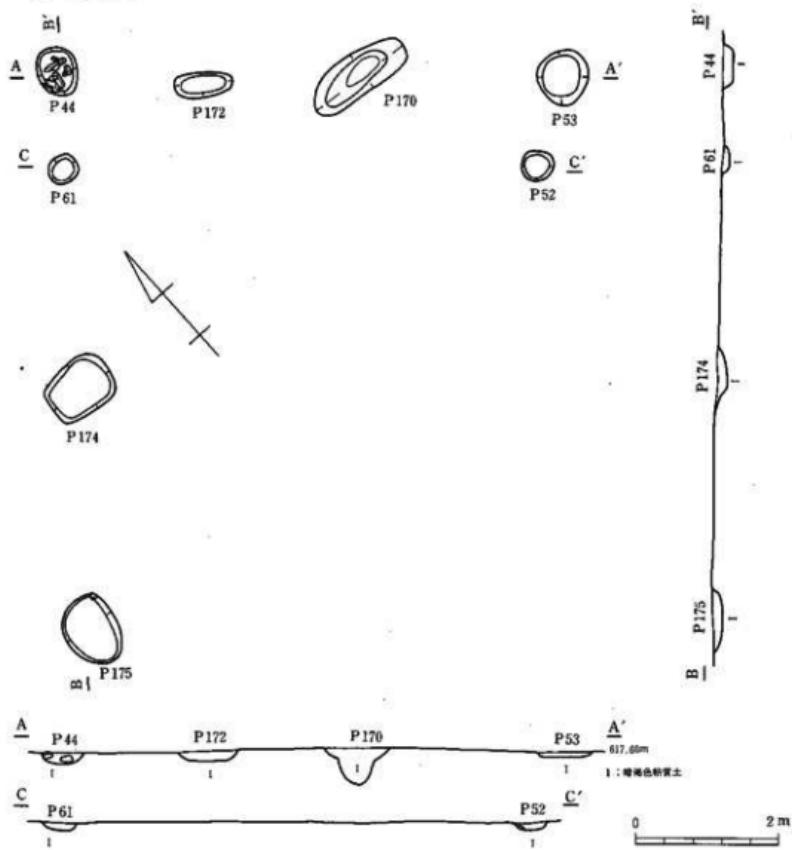
所属時期は、1建・2建が出土遺物・ピット内の覆土及び検出状況から奈良時代末～平安時代中期と考えられる。3建は出土遺物が全くなく、時期は不明である。

第1号建物址



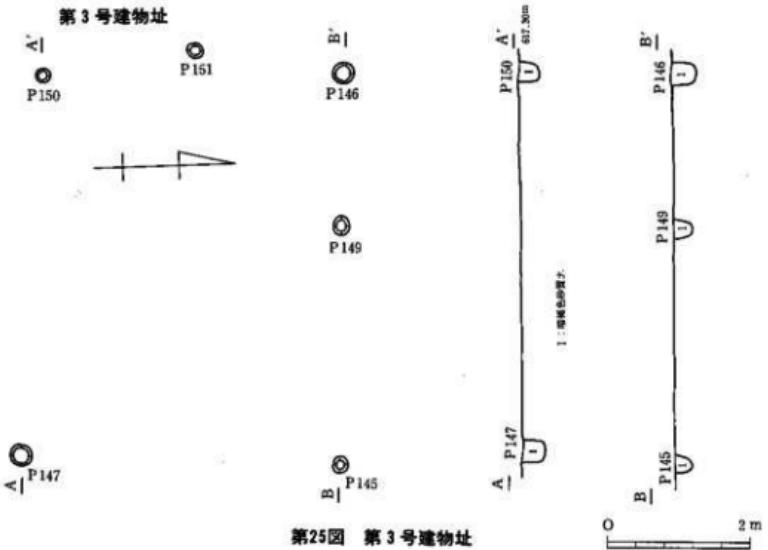
第23図 第1号建物址

第2号建物址



第24図 第2号建物址

第3号建物址



第25図 第3号建物址

第1表 建物址一覧表

No.	平面形 柱配り	主軸方向	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規格 (cm)			柱穴面形	柱穴備考	建物址所見
					No.	長径	短径	深さ		
1	長方形 側柱式	N-8 0°-W	3間×2間 7.2×4.6	桁2.2×2.4 梁2.3×2.7	14	44	36	8	楕円形	柱底あり
					15	64	60	16	円形	
					16	48	40	8	楕円形	柱底あり
					17	64	60	20	楕円形	
					18	60	56	20	楕円形	
					19	64	60	8	円形	
					20	52	44	12	楕円形	礫含有
2	長方形 側柱式	N-4 0°-W	3間×3間 8.0×7.2	桁2.0×2.9 梁1.4×3.4	44	68	42	16	楕円形	礫含有
					172	80	36	12	楕円形	
					173	152	56	56	楕円形	柱底あり
					53	76	72	8	円形	
					61	44	40	8	円形	支柱か?
					174	96	80	12	隅丸方形	
					175	106	76	12	楕円形	
					52	48	44	12	円形	支柱か?
3	長方形 側柱式	N-9 3°-E	2間×2間 4.2×5.6	桁4.2 梁2.0×3.4	145	24	20	36	円形	
					146	28	28	36	円形	
					147	28	28	32	円形	
					148	20	20	28	円形	

4. 檻列

櫻列は3棟を検出した。すべてピットを数多く検出した調査II区に位置する。

第1号櫻列址

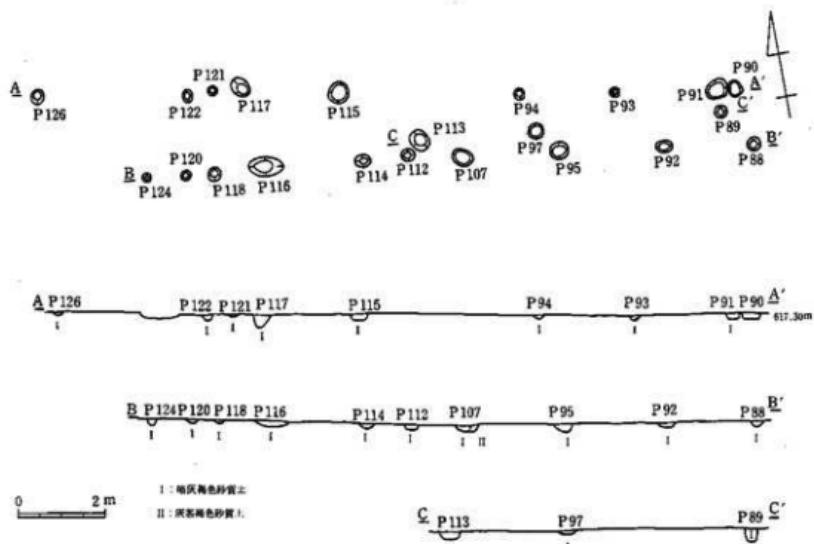
規模は全長16.18mで柱間約0.1~3.9m、10本の柱穴がN-82°-W方向に直線的に並ぶ。柱穴の規模は径0.2~0.5m、深さ0.1~0.3mを測る。柱痕は認められなかった。

第2号櫻列址

柱穴9本が直線的に並び、規模は全長14.8mでN-83°-Wを指向する。柱穴規模は径0.2~0.8m、深さ0.1~0.2mを測る。柱間寸法は0.4~2.0mとばらつきがある。柱痕は認められなかった。

第3号櫻列址

規模は全長7.9mで柱間寸法2.3~3.9m、3本の柱穴がN-85°-Wの方向に一直線に並ぶ。柱穴の規模は径0.4~0.5m、深さ0.1~0.3mを測る。柱痕は認められなかった。



第26図 櫻列

5. 土坑

本遺跡で検出された土坑は総数50基を数える。これらは全域に散在していた。所属時期が確認できるものはないが、検出場所、覆土から見て古代～中世までの巾広い時代のものが検出された。これらの土坑の性格については、確実に墓址と確認できるものが2基(1土坑、42土坑)のみである。他の土坑については不明である。以下、特徴的なものについてのみ記述する。

第1号土坑

規模は188×112cm深さ16cm、平面形状は、北西～南東方向にかけて長軸をもつ不整橿円形を呈する。壁はゆるやかに立ち上がり、底面の中心部が一段低くなり凹んでいる。底部に10～20cm大の礫が2列に組まれており、その内側に焼土・火葬骨片が散在していた。石組はほぼ東西方向に2列に並行して配される。炭化物は多量に出土したが、焼土の量はさほど多くなく、壁、底部に焼かれた痕跡も顕著にみられなかつたが、土坑底部に石組列を持つことから火葬墓であると考えられる。

遺物は、骨片以外に鐵貨が5点出土している(嘉裕元宝2枚、不明3枚)。遺物より、平安末期以降に所属すると考えられる。

第8号土坑

規模は156×92cm、深さ44cmの規模をもち、2往を切って検出された。平面形状は、北西～南東方向にかけて長軸をもつ長方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。底面上には、20～30cm大の亜円礫または角礫が数個検出された。覆土中からは炭が少量出土した。

遺物は、龍泉窯系青磁、瀬戸美濃系天目茶碗片、東海系搗鉢片、馬の歯が出土している。遺物よりみて、本址は、13世紀中頃～後半に帰属すると考えられる。

第42号土坑

規模は126×92cm、深さ12cmで、平面形状は南北に長軸をもつ長方形を呈する。壁はゆるやかに立ち上がる。底面中心部は、南北方向に溝状の掘り込みが見られ、その周囲から石が數点検出された。中央掘り込み内と南壁下には若干量の焼土粒が見られたが、底面及び壁面にも焼けた痕跡は認められなかつた。覆土中からは少量の炭と、それに混在して微量の骨片、骨粉が検出された。以上のことから、火葬墓というより、他の場所に於て茶毘に付した後、この場所に葬ったと考え方が適当であろう。

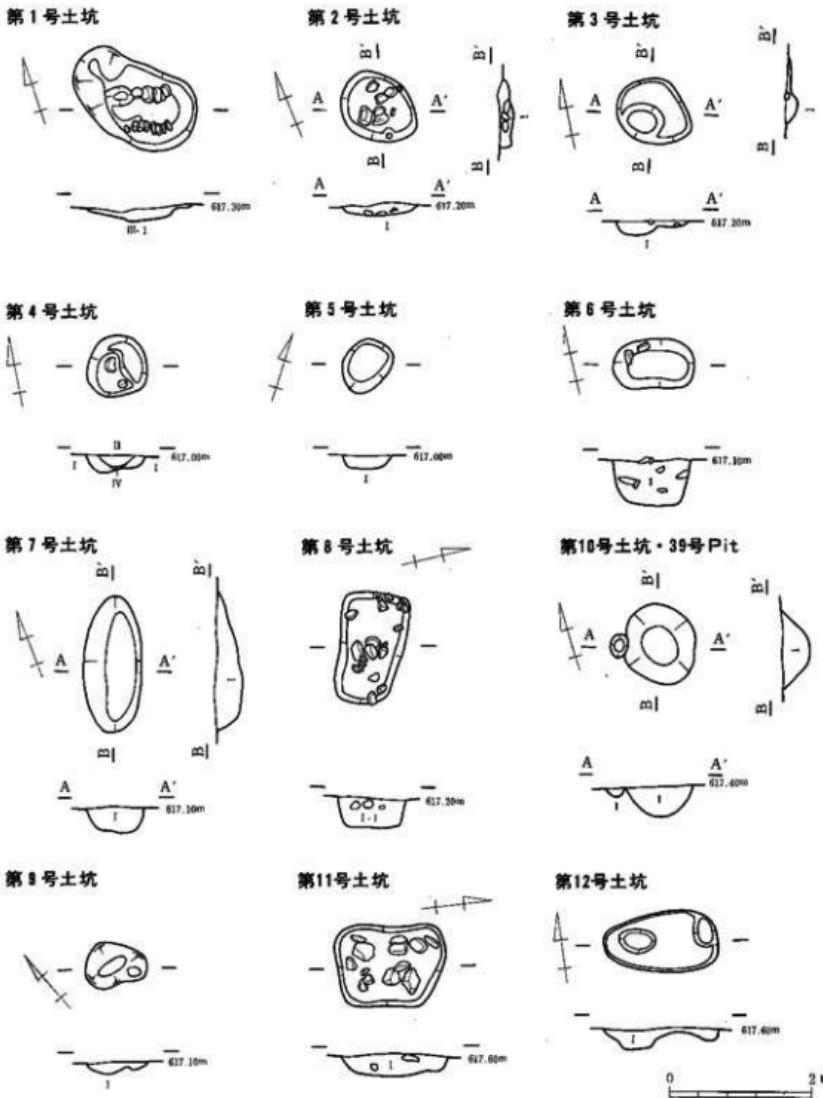
遺物は、銭5点である(政和通宝、景定通宝、元符通宝、不明2点)。このことから本址は中世に属すると考えられる。

第19号土坑

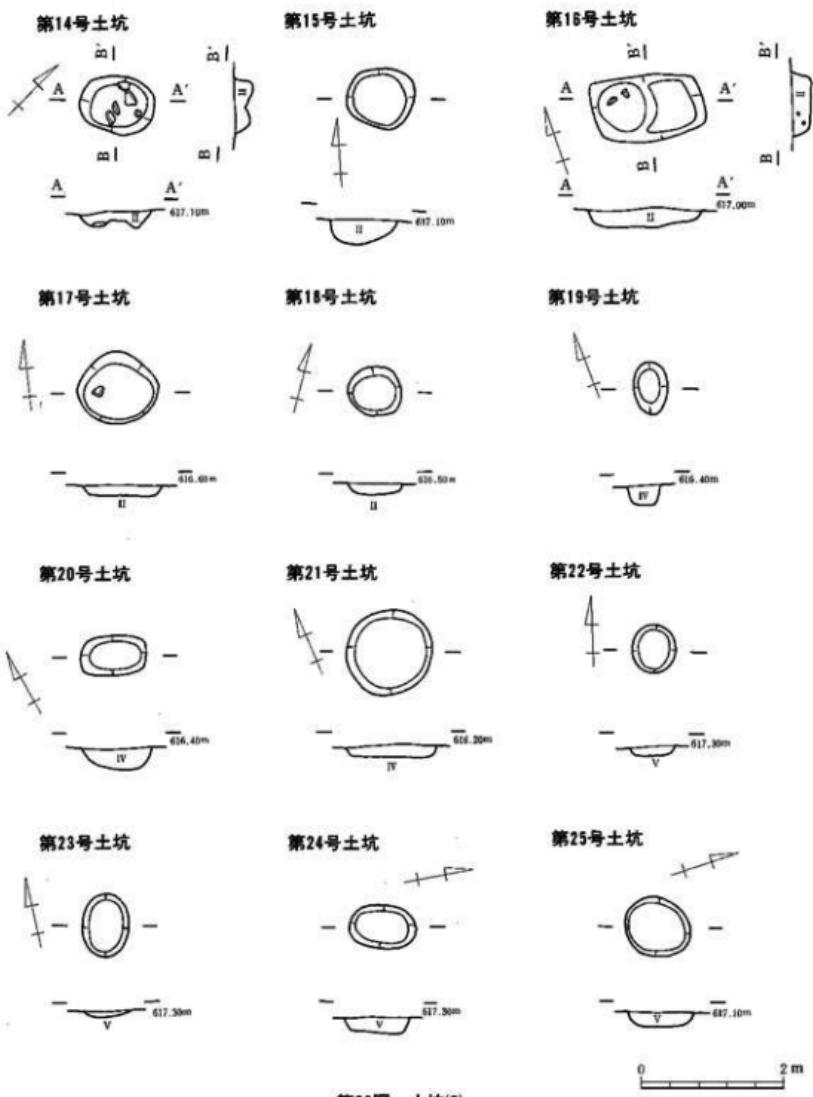
規模は95×87cm、深さ30cmを測り平面形状は円形を呈する。断面はU字状ではば垂直に掘り込まれている。覆土は一層として捉えられ、総量にして約1kgの多量の鐵滓が出土した。鐵滓は、中層位に集中して見られたため廃棄された可能性がある。銀治工房址との関連も考えられるが、本調査ではそのような遺構は見当たらぬ。

第2表 土坑一覧表

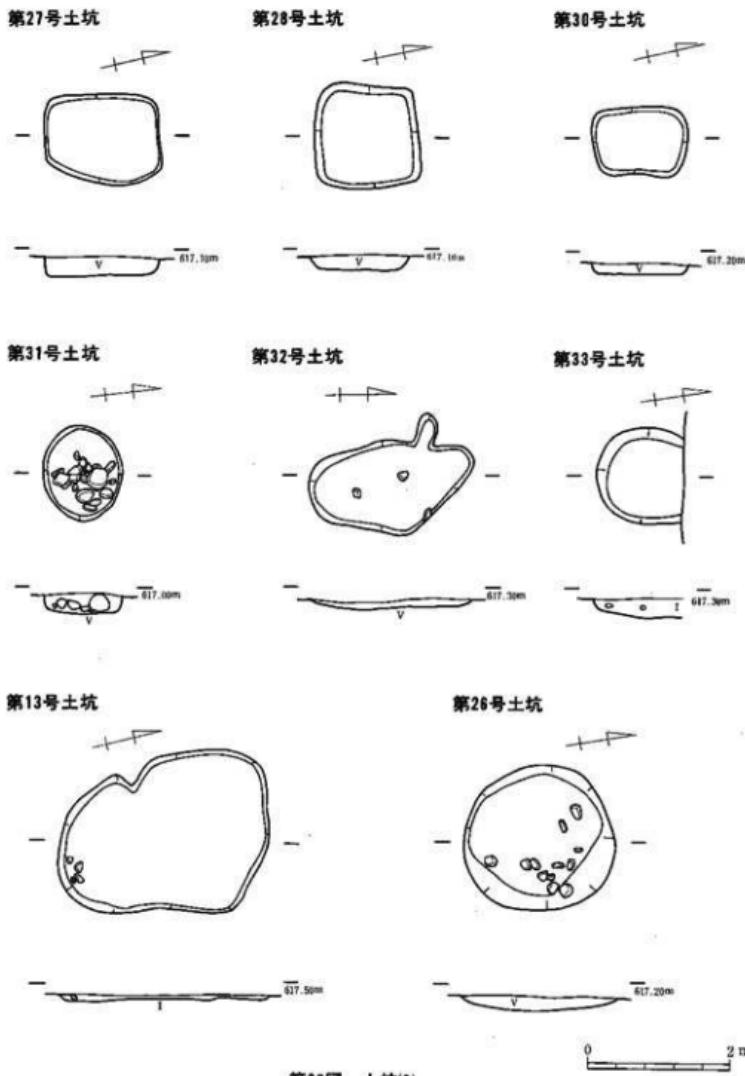
No.	地区	位置	平面形		断面形		規模(cm) 南北・東西・深さ	備考	
			平	面	断	面			
1	I	7住北	不整	格	円	形	直形、二段底	火葬墓、錢貨5枚出土	
2	I	7住東	横	円	形	不整	台形	92×112×20	
3	I	1住西	不整	凹	形	直形、二段底	96×95×20	鐵製品出土	
4	I	5住西	円	形	不整	台形	84×84×24		
5	I	5住北西	円	形	合	形	52×76×16		
6	I	11住南西	横	円	形	不整	台形	68×116×64	
7	I	3住北	横	円	形	合	形、二段底	72×84×4	
8	I	2住内	長	方	形	台	形	92×156×44	
9	I	8住北西	不整	格	円	形	不整	円形	
10	II	1溝南東	円	形	半	円	形	72×88×16	
11	II	17土坑東	不整	方	形	台	形	156×116×32	
12	II	17土坑南東	横	円	形	不整	形	88×160×24	
13	II	10住南西	不整	方	形	不整	直形	160×232×8	
14	III	14住北東	横	円	形	不整	形	104×84×24	
15	III	16住北西	円	形	—	—	—	88×96×—	
16	III	16住北西	方	形	台	形	152×92×28	土器出土	
17	III	22住北東	円	形	合	形	100×115×16	鐵製品出土	
18	IV	22住東	円	形	半	円	形	108×80×12	
19	VII	24土坑西	横	円	形	合	形	76×48×28	
20	VII	25土坑北西	長	方	形	半	円	68×92×28	
21	VII	24土坑南東	円	形	方	形	—	120×124×16	
22	X	10区中央	円	形	方	形	—	64×68×12	
23	X	10区中央	横	円	形	直	形	84×60×8	
24	X	10区中央	横	円	形	合	形	94×60×20	
25	X	32土坑南	横	円	形	方	形	88×84×20	
26	X	25住東	円	形	無	形	—	212×132×20	
27	X	4溝南	不整	方	形	月	形	164×132×28	
28	X	25住北	方	形	台	形	—	148×146×20	
29	X	25住西	不整	格	円	形	方形、二段底	80×68×32	
30	X	25住北西	方	形	方	形	—	80×72×8	
31	X	26住南西	横	円	形	方	形	112×136×28	
32	X	26住西	不整	形	直	形	—	228×152×12	
33	X	37土坑西	円	形	(?)	台	形	(124)×140×28	
34	X	38土坑西	不整	方	形	方	形	124×140×28	
35	X	27住北東	円	形	不整	直	形	72×84×12	
36	X	27住北東	円	形	直	形	—	80×72×8	
37	X	27住北西	円	形	半	円	形	60×64×24	
38	X	2溝北東	円	形	直	形	—	72×76×8	
39	X	27住北西	円	形	半	円	形	84×72×20	
40	X	2溝内	不整	格	円	形	半	円	48×72×20
41	X	27住西	円	形	合	形	—	60×76×28	
42	III	20住西	長	方	形	直	形	128×92×12	
43	III	15住西	不整	円	形	三角	形	172×180×40	
44	III	28住東	円	形	半	円	形	48×56×20	
45	III	28住東	円	形	半	円	形	48×48×20	
46	III	28住南東	円	形	半	円	形	52×52×24	
47	III	53土坑南	円	形	半	円	形	116×128×44	
48	III	52土坑北	横	円	形	方	形	196×148×16	
49	III	30住北東	不整	形	方	形	—	334×220×16	
50	III	30住北東	円	形	半	円	形	80×104×32	



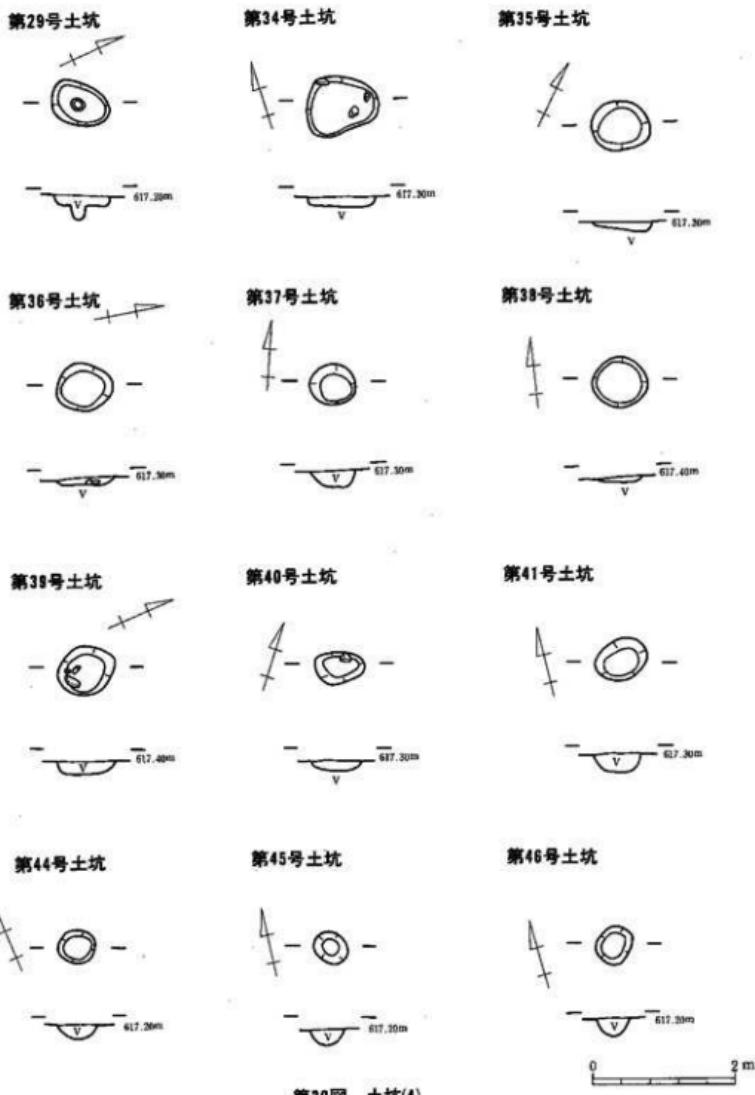
第27图 土坑(1)



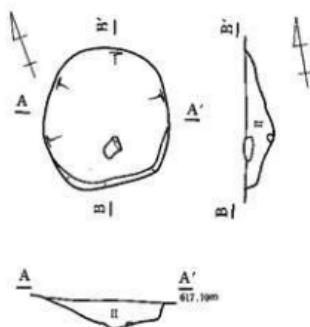
第28图 土坑(2)



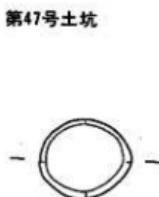
第29図 土坑(3)



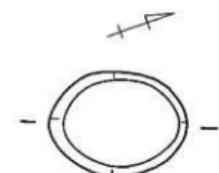
第43号土坑



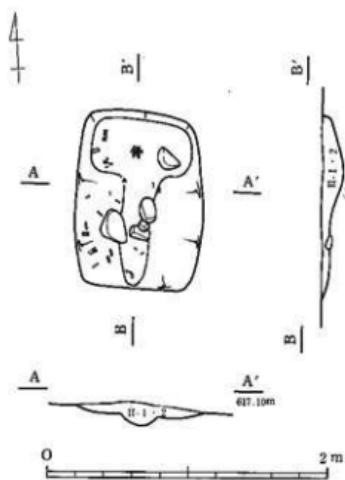
第47号土坑



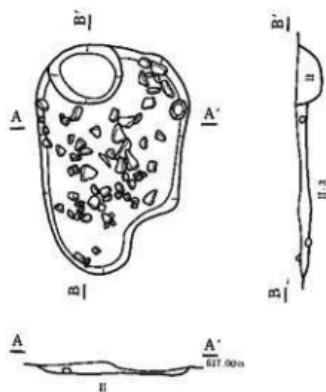
第48号土坑



第42号土坑



第49·50号土坑



上层黑土带	
I：暗棕色粘质土	1：腐化物
II：黑褐色砂质土	2：煤土
III：暗棕色粘质土	3：腐
IV：黑褐褐色粘质土	
V：深褐色砂质土	

第31図 土坑(5)

6. 溝

第1号溝址

調査II区西端の黄褐色土上で南北方向に延びて検出された。後世の攪乱により北側は、はっきりとしなかった。幅2.0~4.9mで、断面形はU字あるいはW字状で深さ0.1~0.3mと浅い。底面には鉄分の沈着が見られるため、水が流れた痕跡が認められる。

第2号溝址

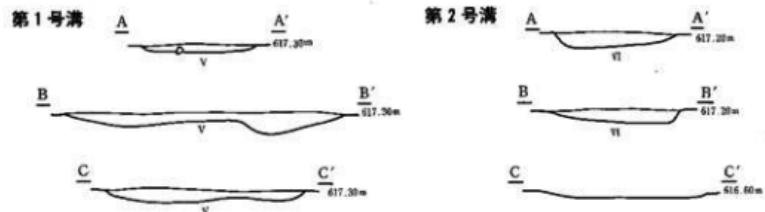
調査XI区西端の灰褐色砂質土上で南北方向に検出された。北側において二又に分岐している。幅2.1~3.0mで、深さは0.1~0.3mを測り、断面形は浅いU字形を呈する。ここには疊の堆積が下層に見られ、鉄分が沈着している。トレンチC地点に於て、龍泉窯系の青磁3点が出土している。

第3号溝址

調査XII区中央やや東寄りで南北方向に検出された。幅1.4~1.9mで、断面形は浅いU字形を呈し、深さは0.2~0.3mを測る。底面は鉄分の沈着が見られ、水を伴っていたものと考えられる。

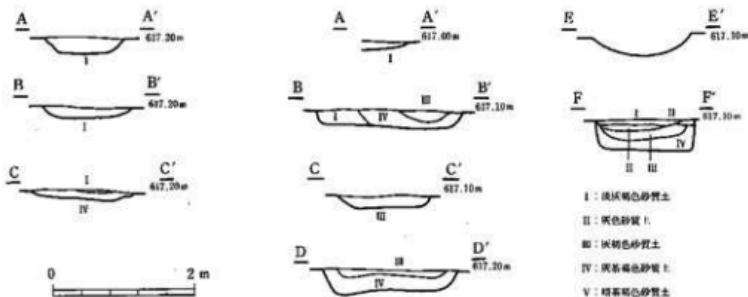
第4・5号溝址

調査XIII区北西端で検出された。4溝が5溝を切っている。断面形は、いずれのものもV字形を呈し、深さは0.2~0.5mを測る。断面から見て、鉄分の沈着があり、覆土は砂質を呈するため、水が流れている痕跡が見受けられる。



第3号溝

第4・5号溝



第32図 溝

第4節 遺物

1 土器・陶磁器

今回の調査で出土した土器の量はコンテナ10箱分である。その多くは小破片であるが、遺構から出土した遺物を中心に極力図化に努め、129点を図化し得た。これらは奈良時代末～平安時代中頃に該当すると考えられる。以下、一括性の高いと考えられる資料を中心に記述する。なお、古代の土器については、松本市内の島立地区で多くの調査例があり、器種、器形の分類、時期ごとの変遷もほぼ明らかになっているのでここではそれに従う。

奈良時代の土器

基本的に食膳具の坏類は、おおかた須恵器で占められる。内訳は、有台のもの(須恵器坏C)と無台で底部に回転糸切り痕の残るもの(須恵器坏D)が主体となり、少量の土器器坏Eがともなう土器群をもって奈良時代として分離した。本遺跡の主体をなす時期ではあるが、資料的には恵まれていない。器種は土器器坏・甕・小形甕・須恵器坏・蓋・長頸壺・円面碗がみられる。

食膳具を中心として、少し詳しく見てみたい。2住・3住・4住・10住・15住・16住・18住・19住・21住・22住から出土した土器が該当する。

ア) 土器器

①坏

8点が図示されている(15・27・28・29・94・95・100・126)。すべて所謂「甲斐型坏」と呼ばれているものであり他のタイプの坏はほとんどみられない。製作技法上の特徴は、1)体部外側下半に横位(ないしは斜位)のケズリ、2)体部外面に横位のミガキ、3)体部内面および見込み部に暗文といった要素をもつ。底部の調整は、底部が観察できるもの(15・27・100)については、すべて回転糸切り後に周開ヘラケズリされている。100の底部には「餘」の墨書きがみられる。

②甕

18点図示したが全形のわかるものはない。器面調整は、胴部外面は縱方向のハケメが入り、内面はナデ、指オサエ、ハケメのものがある。口縁部はヨコナデがなされ、内面に横方向のハケメをもつものもある(35・74・97・116)。これらは、従来の島立地区の分類では、甕Eとしているものである。この他に胴部外面に強いケズリを行って、器厚を薄くしている甕Fが僅かであるが見られる。

小形甕は、ロクロナデ成形され、胴部外面と口縁内面にカキメを持つE類がみられる。

イ)須恵器

①坏

外形が箱形を呈し、高台を有する須恵器坏Cと、無台で底面に回転糸切り痕を残す須恵器坏Dの

2種類がみられる。

須恵器壺Cは9点図化している。法量はまちまちで口径10cm前後から15cm前後を測る。製作技法上の特徴は、すべての底面に回転けずりが見られる。このうち、底部中心部に回転糸切り痕を残すものと、底部全体に回転けずりがなされるものが見られる。112は底部中心部に静止糸切り痕が見られる。86の底部には「又」という墨書きが見られる。

須恵器壺Dは、同壺Cと異なりほとんど単一規格で作られている。その口径は10.8~15.9cmの範囲内にあり、12.5~13.0cmに集中する。83・87・88には墨書きがみられる。

その他、特記すべき遺物としては円面硯がある。残存度は比較的良好で、硯面から脚部まで図化・復元できた。陸の部分には擦痕が見られ、摩滅している。海には墨の付着が見られ、使用されていた痕跡がうかがえる。長方形の透かしは24孔あり、脚部外面から鋭利なヘラ状工具でくりぬかれている。

平安時代の土器・陶器

土師器、須恵器、灰釉陶器の3種類で構成される。器種は壺・塊・碗・蓋・皿・盤・小形甕・甕・長颈甕がみられる。平安時代前半~中頃までの土器様相であるが、本遺跡の主体ではなくなるので、資料的には数少ない。1住・8住・20住出土遺物があてられる。

以下、食膳具を中心として概観したい。

ア).土師器

①壺

10点図示している(6・50・51・52・53・56・101・102・103・104)。このうち土師器壺Cとの内黒土師器(黒色土器)は6点みられ、1住と8住から出土している。壺Cは口径20cm以上のもの、口径13~14cmのもの、口径12cm前後のものの三種類がみられる。土師器壺Dは20住から出土している。内外面ともロクロナナ字痕が明瞭に残り、底部には回転糸切り痕をもつ。従来の島立地区の遺跡の分析結果を参考にすると、土師器壺Cを中心とする土器群の方が同壺Dを中心とする土器群より先行する。

②塊・皿

塊・皿とともに、内面黒色処理されたものが1点づつ出土している(49・53)。

イ).須恵器

①壺

6点図示している(54・55・59・60・64・106)。ロクロ調整痕が目立ち、体部の開きが強くなる傾向にある。

中世以降の遺物

遺物量は非常に少なく図示できたのは9点にすぎない。焼物の種別では土師質土器、山茶碗、施釉陶器がみられる。以下、種別ごとに記述をする。

(1) 土師質土器

名称については、「かわらけ」、土師質土器皿、中世土器皿、土師器皿などと呼ばれている。ここでは、その系統に対する検討などはなすべもないため、とりあえず土師質土器という曖昧な名称を用いることとする。

本遺跡から出土した土師質土器は2点のみである(15・119)。15は小型のもので口径7.4cm、器高1.5cmであり、119は大型なもので口径12.6cm、器高2.7cmを測る。22は、手捏ね成形で、口縁部がヨコナデされ、体部下半～底部にかけてヘラケズリの後ナデが施されている。119は、成形は粘土板を指オサエによって形づくりの手捏ねによるものである。口縁部には約1cmの幅の広いヨコナデを一周入れ、さらに端部に近いところに弱いヨコナデを一周入れており、2周のヨコナデが観察される。

(2) 山茶碗

2点出土している(79・120)。79は、口縁端部を玉縁状に仕上げている。120は皿形を呈し、成形は腰部からまるみをもたせて立上っている。

(3) 陶磁器

ア).輸入陶磁器

青磁が3点出土している。分類については横田賢次郎・森田勉氏の研究に伴う(文献1)。

いずれも龍泉窯系のもので、124は体部外面に蓮弁文がみられ、碗I類に分類される。125と129は破片であるため明言できないが、文様は見られないため碗I類に分類できる。

イ).古瀬戸系陶器

121は底部に糸切り痕を残し、内面全体に灰釉が施される小皿である。釉層の厚い安定した灰釉がかかっており、時期的には古瀬戸中期様式に比定されよう(文献2)。

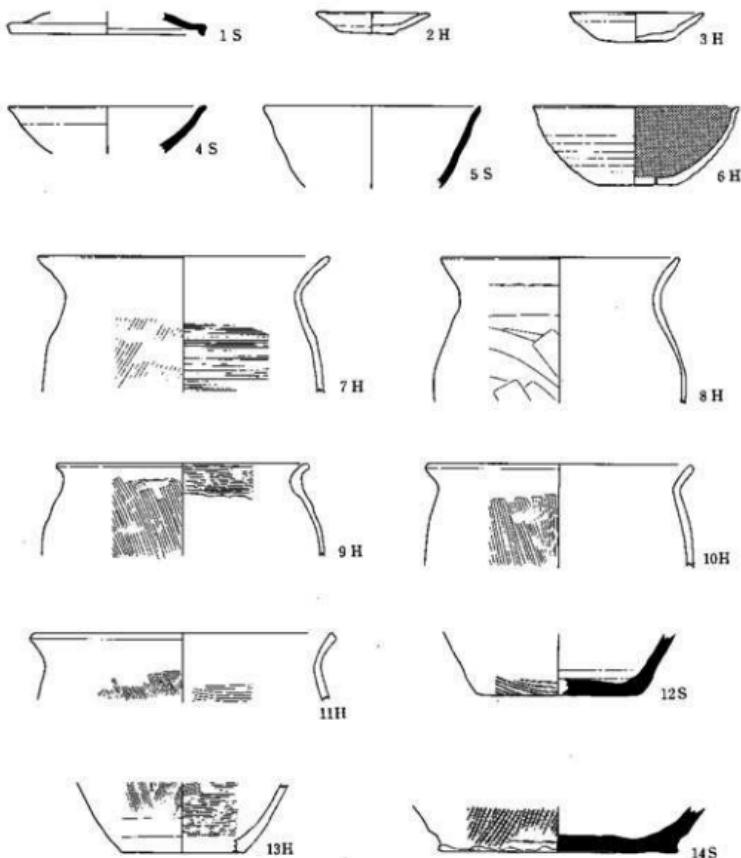
ウ).甕(産地不明)

II区検出面より出土している。胎土は淡赤灰色で、外面に銷釉を施している甕である。内面は、板状の工具によりナデが入れられ、外面は横方向に丁寧にナデが施されている。常滑系のものであろうか。

参考文献

- 文献1 横田賢次郎・森田勉 「大宰府出土輸入陶磁器について一型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集』4 (1978)
文献2 藤澤良祐 「古瀬戸」概説『美濃陶磁歴史館報』III (1982)

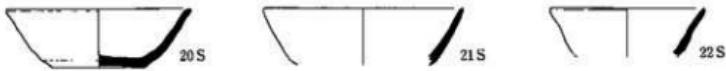
第1号住居址



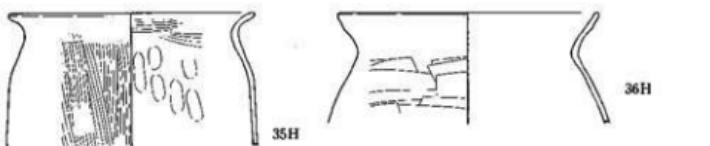
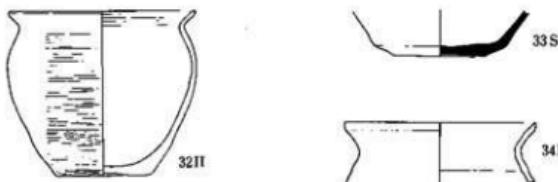
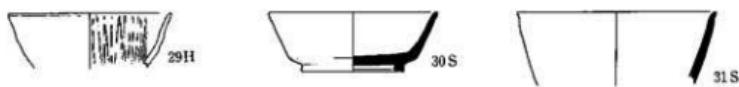
第2号住居址



第33図 出土土器(1)



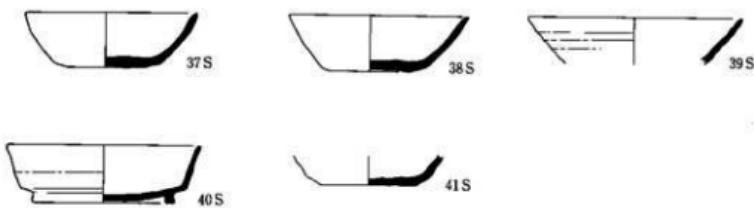
第3号住居址



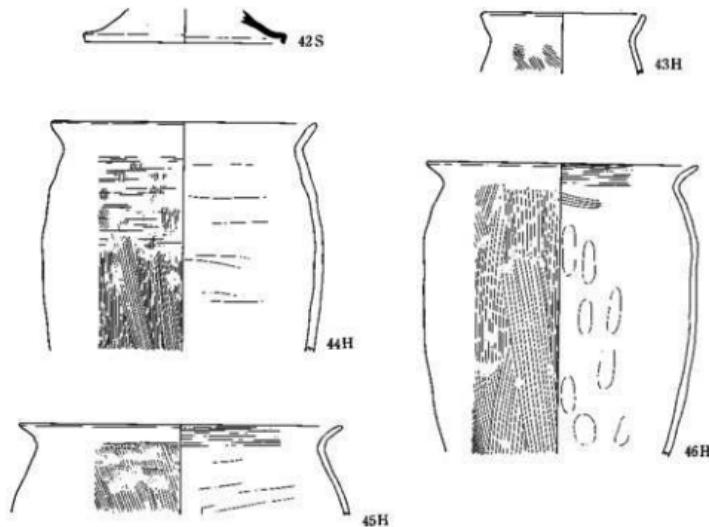
第34図 出土土器(2)

0 5 10cm

第4号住居址



第5号住居址



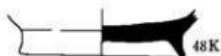
第6号住居址



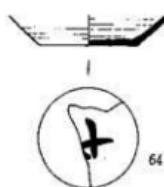
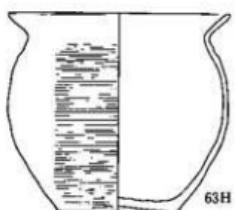
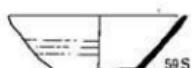
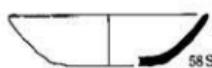
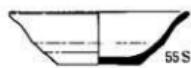
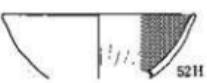
0 5 10cm

第35図 出土土器(3)

第7号住居址

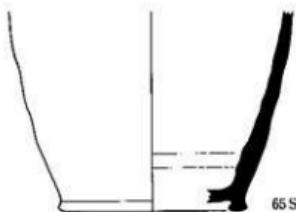


第8号住居址

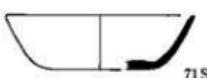
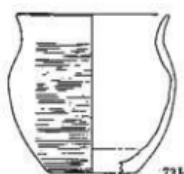
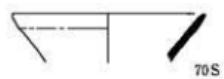


0 5 10cm

第36図 出土土器(4)



第10号住居址



0 5 10cm

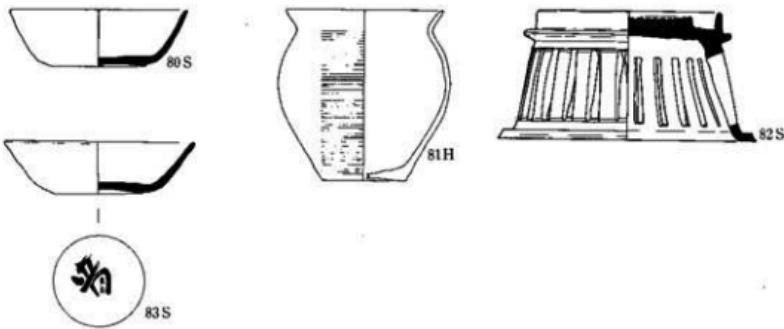
第37図 出土土器(5)



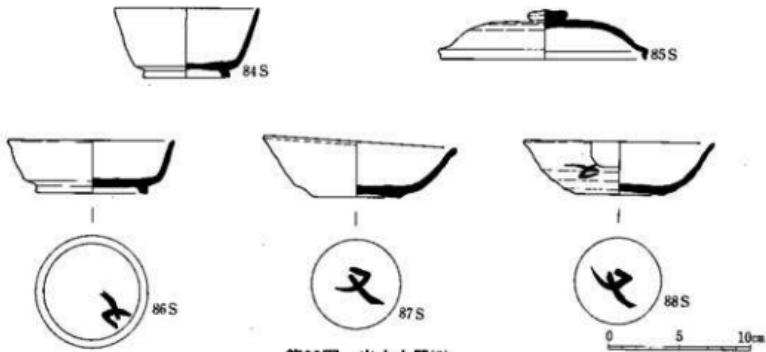
第14号住居址



第15号住居址

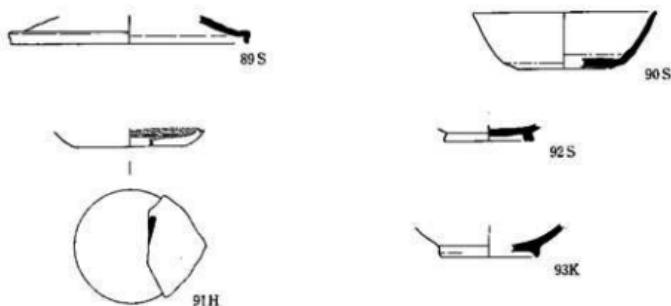


第16号住居址

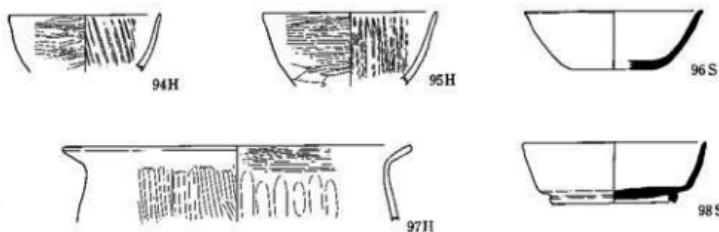


第38図 出土土器(6)

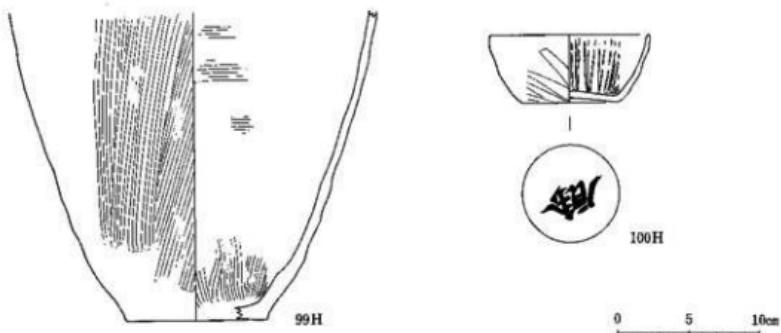
第17号住居址



第18号住居址

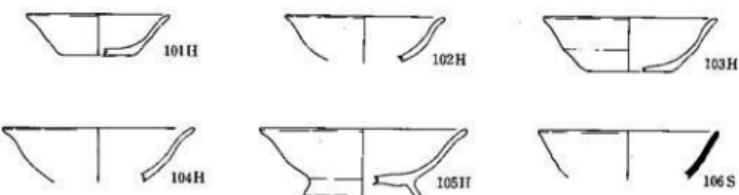


第19号住居址

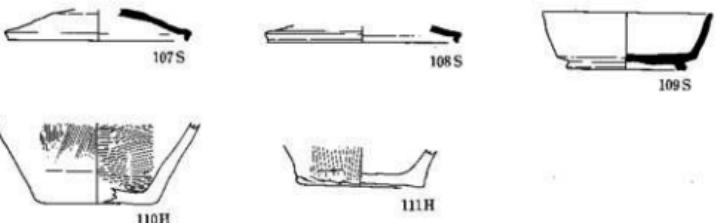


第39図 出土土器(7)

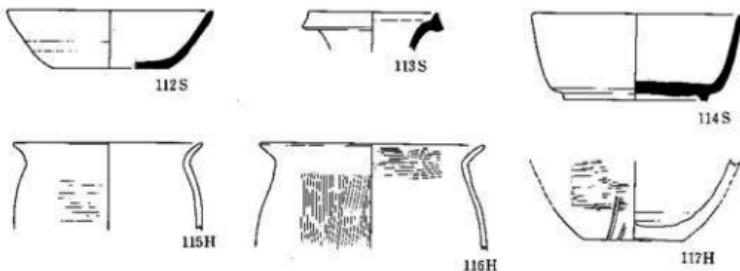
第20号住居址



第21号住居址



第22号住居址

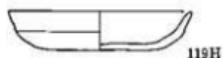


第28号住居址



第40図 出土土器(8)

豎穴状造構



119H

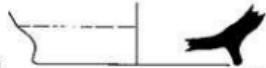
土坑



120・無釉陶器



121・施釉陶器



122K

ピット



123H

溝址



124・磁器

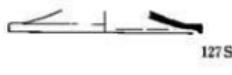


125・磁器

検出面



126H



127S



128・施釉陶器

耕土



129・磁器

0 5 10cm

第41図 出土土器(9)

第3表 出土土器觀察表

No.	出土施設	種別	形	寸法(cm)	側面(縦横)断面(横)	側面(縦)	調査・測量の特徴	
							外観	内面
1	1住	便器	蓋C	13.6	1/4 横長	斜面	斜面	斜面
2	2	土槽	H口	6	1.5 (完)	直角	直角	直角
3	3	土槽	H口	9.5	5.2 2.05 (完)	直角	直角	直角
4	4	便器	H口	14	1/7 横長	直角	直角	直角
5	5	便器	WCN	15.2	— 直	横長	横長	横長
6	6	土槽	H口	14.4	5.5 3.55 (完)	直角	直角	直角
7	7	便器	H口	16.8	1/4 直角	直角	直角	直角
8	8	便器	H口	16.8	1/4 直角	直角	直角	直角
9	9	便器	H口	17.6	1/5 直角	直角一端 直角	直角一端 直角	直角一端 直角
10	10	便器	H口	18.6	— 直	直角	直角	直角
11	11	便器	H口	21	— 直	直角	直角	直角
12	12	便器	H口	11.6	(1/4) 直角	直角	直角	直角
13	13	土槽	H口	8.8	(1/2) (1/3)	直角	直角	直角
14	14	便器	H口	17	(1/3) 直角	直角	直角	直角
15	15	土槽	H口	7.4	— 直	直角	直角	直角
16	16	便器	H口	13.4	2.7 直角	直角	直角	直角
17	17	便器	H口	12.6	6.2 3.7 (完)	直角	直角	直角
18	18	便器	H口	12.4	6.5 3.9 (完)	直角	直角	直角
19	19	便器	H口	12.4	7.6 3.6 (完)	直角	直角	直角
20	20	便器	H口	13.0	6.5 4.1 (完)	直角	直角	直角
21	21	便器	H口	14	7.5 (完)	直角	直角	直角
22	22	便器	H口	16.8	1/4 直角	直角	直角	直角
23	23	便器	H口	13.6	6.4 4.2 (完)	直角一端 直角	直角一端 直角	直角一端 直角
24	24	便器	H口	11.2	6.8 (完)	直角	直角	直角
25	25	便器	H口	5.6	5.8 (完)	直角	直角	直角
26	26	土槽	H口	13.2	4.65 (1/3)	直角	直角	直角
27	27	土槽	H口	11.6	6.7 4.95 (完)	直角	直角	直角
28	28	便器	H口	10.4	1/6 直角	直角	直角	直角
29	29	便器	H口	11.2	1/6 直角	直角	直角	直角
30	30	便器	H口	12	7.2 4.7 (1/3)	直角	直角	直角
31	31	便器	H口	14	1/4 直角	直角	直角	直角
32	32	土槽	小便器	13.2	6.9 11.6 (完)	直角	直角	直角
33	33	便器	H口	6.4	(1/2) 直角	直角	直角	直角

No.	出土地所	種別	形	寸法 (cm)	測定者 名前	測定 者名前	内面	外側	成 形	調 研	形 态 の 特 徴	備 考	
66	出土地	実物	扁C	14.2	2.7	片口	片口	片口	ロクロナデ、尖形部断面へラグゼリ、つまみ折子ナデ、縫合ヨコナデ	12	西園		
67	19世	実物	#	13.8	1/3	灰	灰	灰	ロクロナデ、尖形部断面へラグゼリ、つまみ折子ナデ、縫合ヨコナデ	13	西園		
68	n	n	#	平D	12.8	6	4	1/5	白	ロクロナデ、尖形部断面へラグゼリ、つまみ折子ナデ、縫合ヨコナデ	9	西園	
69	n	n	#	n	13.6	2/5	灰	灰	ロクロナデ、尖形部断面へラグゼリ、つまみ折子ナデ、縫合ヨコナデ	10	西園		
70	n	n	#	n	13.2	6.8	3.8	1/5	灰	ロクロナデ、ロ横ヨコナデ、縫合ヨコナデ	6	西園	
71	n	n	#	n	10.5	3.1	11.2	8	2/3(3)	灰	ロクロナデ、縫合ヨコナデ、縫合横ヨコナデ	4	西園
72	n	n	#	n	10.5	3.1	11.2	8	2/3(3)	灰	縫合ヨコナデ、縫合横ヨコナデ、内面ロクロナデ	5	西園
73	n	n	#	變E	20.4	1/4	灰	白	ロ横ヨコナデ、縫合ヨコナデ、内面ロクロナデ	2	西園		
74	n	n	#	n	13.4	1/4	灰	白	ロ横ヨコナデ、縫合ヨコナデ、内面ロクロナデ	6	西園		
75	n	n	#	n	9	(1/4)	灰	白	ロ横ヨコナデ、縫合ヨコナデ、内面ロクロナデ	1	西園		
76	n	n	#	n	20.6	1/6	1/6	1/6	1/6	灰	山根ヨコナデ、縫合ヨコナデ、内面ロクロナデ	7	西園
77	n	n	#	n	9.8	(1/4)	灰	白	山根ヨコナデ、縫合ヨコナデ、内面ロクロナデ	3	西園		
78	n	n	#	n	19.8	1/6	1/6	1/6	1/6	灰	山根ヨコナデ、縫合ヨコナデ、内面ロクロナデ	1	西園
79	14世	実物	輪形輪形	輪(7)	34	一組	灰灰	灰灰	ロクロナデ、ロ横ヨコナデ、縫合ヨコナデ	1	西園		
80	15世	実物	輪形	輪D	12.4	6.6	4	(3/5)	灰	ロクロナデ、ロ横ヨコナデ、縫合ヨコナデ	3	西園	
81	n	n	上傳	小形輪形	11	6	17	1/7(2)	灰	山根ヨコナデ、内面ロクロナデ、縫合ヨコナデ、内面横ヨコナデ	2	西園	
82	n	n	実物	円筒形	12.6	18	9	4/6	灰	ロクロナデ、内面横ヨコナデ、縫合ヨコナデ、内面横ヨコナデ	4	西園	
83	n	n	n	平D	13.3	6.2	3.05	(2)	白	ロクロナデ、内面横ヨコナデ、内面横ヨコナデ	1	西園	
84	16世	n	n	HC	16.2	6.2	4.9	(2/3)	灰白	ロクロナデ、ロ横ヨコナデ、縫合ヨコナデ	4	西園	
85	n	n	#	HC	14.4	3.5	2/5	灰	白	ロクロナデ、内面横ヨコナデ、縫合ヨコナデ	5	西園	
86	n	n	#C	11.7	7.8	3.7	(1/2)	灰	山根灰	山根ヨコナデ、内面横ヨコナデ、縫合ヨコナデ	3	西園	
87	n	n	#D	13.1	6.2	3.9	(2)	灰	山根灰	山根ヨコナデ、内面横ヨコナデ、縫合ヨコナデ	2	西園	
88	n	n	#	n	13.4	6.2	3.7	1/6	灰	山根灰	山根ヨコナデ、内面横ヨコナデ、縫合ヨコナデ	1	西園
89	17世	n	n	2C	16.6	一組	灰灰	灰灰	ロクロナデ、ロ横ヨコナデ、縫合ヨコナデ	2	西園		
90	n	n	n	HD	12.8	6.6	4	1/2	灰	ロクロナデ、ロ横ヨコナデ、縫合ヨコナデ	5	西園	
91	n	n	土師器	HC	8	(1/3)	灰	灰	ロクロナデ、体部横ヨコナデ、縫合横ヨコナデ	4	西園		
92	n	n	実物	#	6.2	(2)	灰灰	相灰	ロクロナデ、縫合横ヨコナデ	3	西園		
93	n	n	実物	壺	6.6	(1/2)	白	白	ロクロナデ、縫合横ヨコナデ	6	西園		
94	18世	土師器	HC	10.6	1/6	玉砂	玉砂	玉砂ヨコナデ、体部横ヨコナデ	1	甲安室			
95	n	n	n	n	12.2	4	1/2	玉砂	玉砂	玉砂ヨコナデ、体部横ヨコナデ、内面ロクロナデ	2	西園	
96	n	実物	HD	12.4	6	4.1	(1/3)	灰	ロクロナデ、ロ横ヨコナデ、縫合ヨコナデ	4	西園		
97	n	土唐草	鉢	34.2	1/3	黄砂灰	黄砂灰	山根ヨコナデ、内面ヨコナデ、縫合ヨコナデ	3	西園			
98	n	実物	HC	12.8	9	4.2	完	灰	ロクロナデ、ロ横ヨコナデ、縫合ヨコナデ	5	西園		
99	19世	土師器	變E	n	19	(一組)	灰	相灰	山根ヨコナデ	2	西園		

名 称	原产地	種 類	別 名	形 状	外 形	體 積		性 能	利 用
						高さ (cm)	幅 (cm)		
100	19世 紀後半	口徑 14.0	外 筒	内筒	外 筒	11.2	6.8	4.85 (1.8)	蒸 氣
101	20世 紀初	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	5	2.9	1.72 (1.7)	蒸 氣
102	"	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	11.2	6.8	1.6 (1.7)	蒸 氣
103	"	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	12.2	5.6	3.8 (1.7)	蒸 氣
104	"	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	13.4	5	1.4 (1.7)	蒸 氣
105	"	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	14.6	8	4.9 (1.7)	蒸 氣
106	"	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	12.6	5.6	1.8 (1.7)	蒸 氣
107	21世 紀初	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	12.6	5.6	1.6 (1.7)	蒸 氣
108	"	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	13.4	5	1.4 (1.7)	蒸 氣
109	"	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	11.9	6.2	4 (1.7)	蒸 氣
110	21世 紀初	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	13.4	5.6	1.6 (1.7)	蒸 氣
111	"	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	14.6	8	4.9 (1.7)	蒸 氣
112	22世 紀初	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	14.4	8	4.1 (1.7)	蒸 氣
113	"	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	13.4	5.6	1.6 (1.7)	蒸 氣
114	"	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	14.8	10	6.1 (1.8)	蒸 氣
115	"	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	13.4	5.6	1.6 (1.7)	蒸 氣
116	"	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	15.9	7	1.8 (1.7)	蒸 氣
117	"	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	15.9	7	1.8 (1.7)	蒸 氣
118	26世 紀初	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	16.8	7	1.8 (1.7)	蒸 氣
119	29世 紀初	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	17.3	7	1.8 (1.7)	蒸 氣
120	19世 紀初	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	17.3	7	1.8 (1.7)	蒸 氣
121	"	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	18.5	4.4	2.4 (1.7)	蒸 氣
122	"	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	14.6	7	1.8 (1.7)	蒸 氣
123	17世 紀	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	13.2	6.7	3.8 (1.7)	蒸 氣
124	清	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	14.6	7	1.8 (1.7)	蒸 氣
125	清	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	19.8	4.9	1.8 (1.7)	蒸 氣
126	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	13.4	7	1.8 (1.7)	蒸 氣
127	"	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	14.6	7	1.8 (1.7)	蒸 氣
128	清	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	12.2	5	1.8 (1.7)	蒸 氣
129	清	外 筒	外 筒	外 筒	外 筒	12.2	5	1.8 (1.7)	蒸 氣

2 鉄器・銅製品・錢

鉄器としては11種、29点ある。刀は完形の1がある。茎に木質部が付着するもの(3~5)がある。このうち5は、本来の身部を半分に止め、手元側を大きく茎として使用している。鍔は2点である。両者とも薙被部関がよく観察できる。完形の9は身の基部巾も、47mmとかなり大きい。釘は大形の11~15、小形の16~18がある。このうち完形の11には木質部が付着して残る。又、13、14は真中で大きく屈曲する。普遍的な使用では考えられない。19の鎌では薄手で鋭い刃部もよく観察できる。基部、刃部を大きく欠き、片面には炭化した植物が多量に付着する。これらの植物は草の類で、方向もまちまちである。刈草と鎌を、住居内に置き、一緒に焼けたものである。20は鑿である。袋状となった上部は割れて広がり、刃部両側も湾曲している。21は鍛鉈であろう。23は片面に浮き立たせた文様が見られる。飾り金具であろうか。用途は分らない。24は中空になっている鎌であろうか。25~28は厚さ4~7mm、鎌割れも激しい板状鉄片である。湾曲しており鐵鍋のようなものかも知れない。29は紡錘車の軸である。

30以下は銅製品である。30、31は鈴帶で、同一物が表裏に剥離したものと思われる。32~34は、刀か太刀の柄か鞘の責金具か、又35も同様の切羽ではなかろうか。これらの遺物を造構別に所属時期を求めるとき、13点が中世に含まれる。短刀、刀子の2、4、6、角釘の12、鑿、杏葉、鐵鍋らしき鋳物片、銅製品の工芸品(32~35)等である。他は古代(奈良末~平安中期頃)となろうか。

錢は10点ある。

3 石器・石製品

石器として、砥石、打製石器。石製品として硯がある。

砥石は大よりな自然石を利用、下に置いて使用したものがある。完形の1は、使用面が極端に磨耗し周囲に線条の使用痕が残っている。2は破損品であり、使用痕はほんの僅かである。これに対し、手持ち使用と思われる2点がある。いずれも小片となっているが、線条痕が横方向に激しく残る3と、使用痕がほとんど残らない4がある。

硯は粘土質岩を利用している。小形で一部を欠するが、ほぼ全体が分かる。使用面は縁から陸、海部を削り出した様子がよく残り、裏面は節理面に若干手を加え、平均化させたのみである。

打製石器は4点ある。石斧の6、7は砂岩製で風化が激しい。9はぶ厚い横刀型石器である。刃部を欠する8も含め使用痕はまったく観察することができない。

これらの帰属する時期については、砥石、硯はいずれも住居址からの出土で、前者は古代に、後者は中世に置くことができる。打製石器、4点は住居址、排土中各2点であるが、いずれも縄文時代の所産である。なおこれ以外に黒曜石が4点あるが石器ではない。

第4表 鉄器・銅製品一覧表

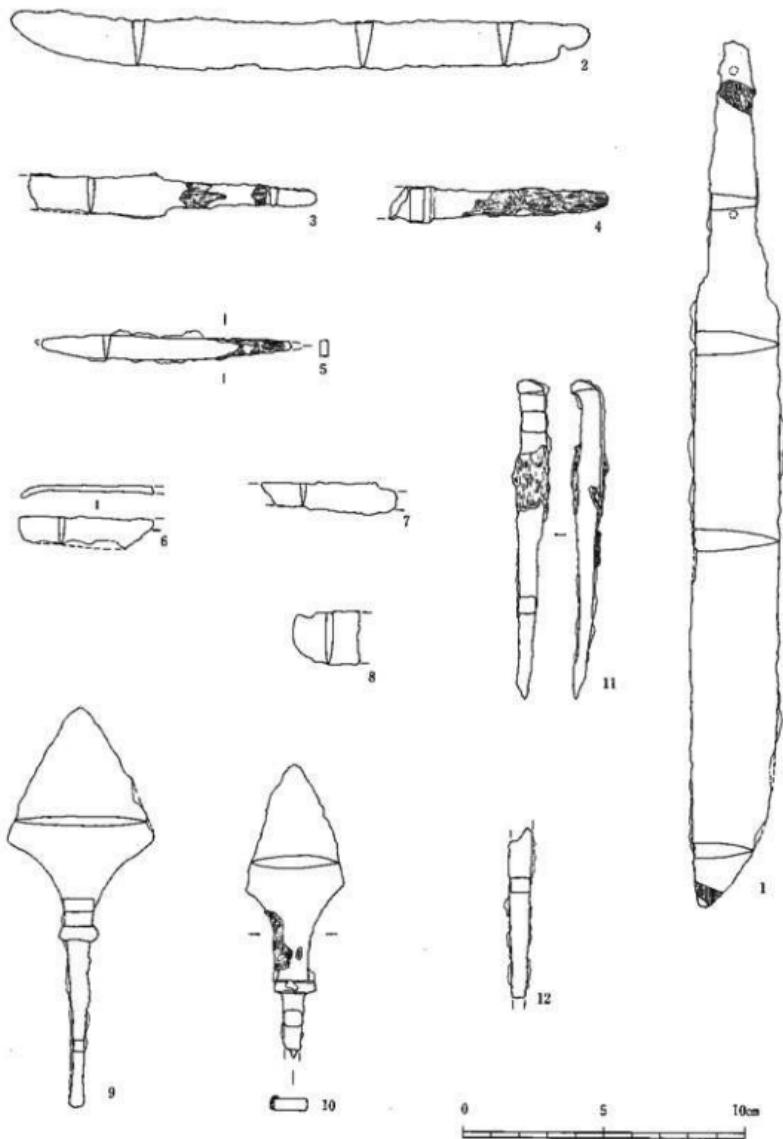
番号	種別	出土遺構	寸法(mm)			重量(g)	番号	種別	出土遺構	寸法(mm)			重量(g)
			長さ	巾	厚さ					長さ	巾	厚さ	
1	刀刃	第2号住居穴状遺構	307	30	9	165	19	鍔	第29号住居址	(10)	38	3	30
2	刀子	"	(204)	16	6	40	20	鑿	第7号住居址	172	22	19	86
3	"	第3号住居址	(102)	12	4	13	21	鏟	第29号住居址外北	97	8	7	10
4	"	第2号住居穴状遺構	(78)	12	5	7.5	22	工具?	第2号住居穴状遺構	(21)	7	6	2
5	"	第3号住居址	(89)	9	3	6	23	古鏡	第14号住居址	73	49	6	25
6	"	第8号土坑	(47)	(45)	2	3	24	鐮	第18号住居址	(39)	4	4	7.5
7	"	第5号住居址外面	(48)	8	2	3.5	25	銅片物	第8号土坑	(55)	(44)	5	18.5
8	"	第29号住居址外	(24)	18	2	3	26	"	第29号住居址	49	35	7	34
9	鐵	第29号住居址	142	47	5	41	27	"	"	38	17	6	12
10	"	"	(101)	31	6	35.5	28	"	第17号土坑	(27)	(18)	(4)	5
11	角釘	第18号土坑	113	8	7	19	29	筋鉄車	第3号土坑	99(160)	73(7)	6	21.5
12	"	第14号住居址	(60)	8	5	6	30	帶金具	第3号住居址	(24)	(14)	1.5	2
13	"	第17号住居址	45	25(9)	6	13	31	"	"	(5)	(19)	1	0.5
14	"	"	51	37(6)	5	9	32	市の貴金属?	第33号土坑	41	17	2	4.5
15	"	"	(69)	7	6	16	33	"	第26号土坑	40	(9)	1	1.5
16	"	"	47	5	4	3	34	"	"	(22)	(13)	2	0.5
17	"	"	48	5	5	2.5	35	"	"	27	20	1	1.5
18	"	"	44	5:	4	2	"	"	"	"	"	"	"

第5表 銭一覧表

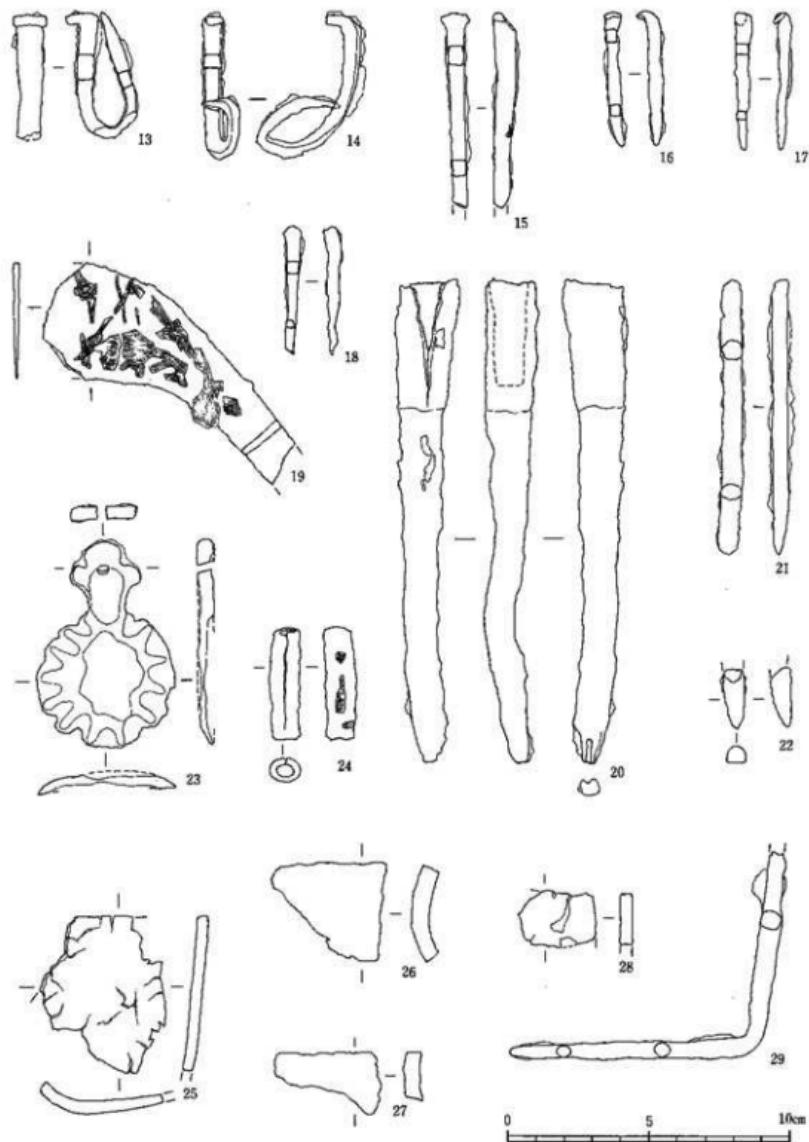
番号	出土遺構	銭種	直径(mm)	重量(g)	初鋳年	備考	
						長径	短径
1	第2号住居址	元祐通宝	24.5	3	1066		
2	第12号住居址	皇宋元宝	"	3.5	1038		
3	第1号土坑	嘉祐元宝	23.0	3	1056		
4	"	紹聖元宝	"	2.5	1094	2点密着して出土	
5	"	嘉祐元宝	"	2	1066	"	
6	第47号土坑	政和通宝	24.5	4	1111		
7	"	綱型元寶?	24.0		1094		
8	"	皇宋元宝	25.0		1038	3点密着して出土	
9	"	大中通宝	22.5		976	"	
10	"	元祐通宝	24.0		1098	"	

第6表 石器一覧表

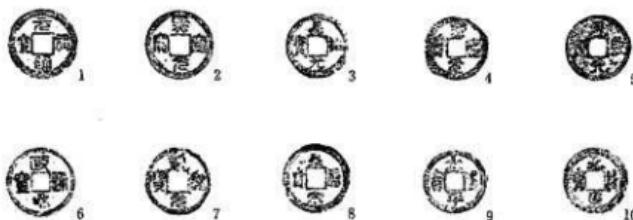
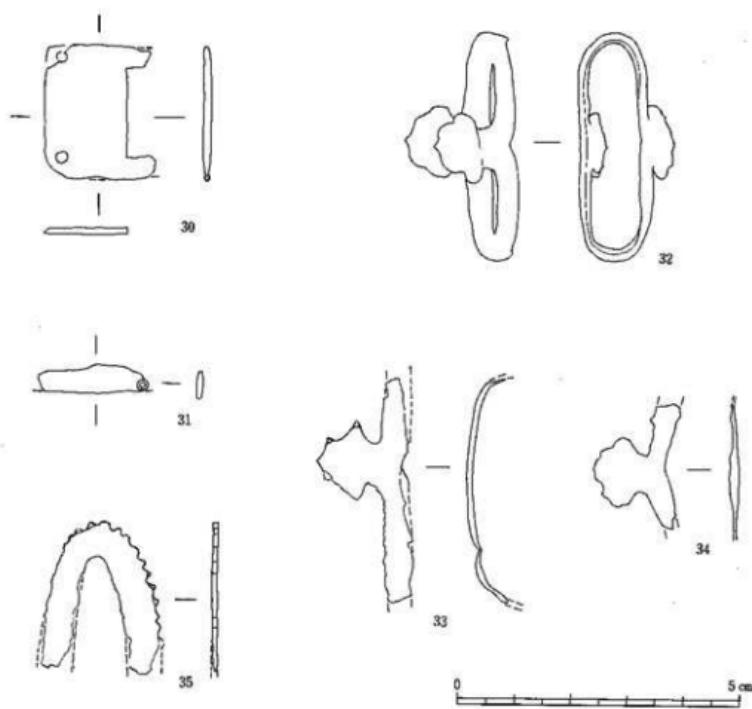
番号	出土地	種別	寸法(mm)			重量(g)	石質	備考
			長さ	巾	厚さ			
1	10号住居址	砾石	31.8	13.1	6.4	4,150	砂岩	使用による減り大
2	15号住居址	"	(16.5)	(10.7)	4.9	1,360	"	
3	54号土坑	"	(42)	(2.7)	(2)	20	粘土質岩	大破した小片
4	20号住居址	"	4.8	3.1	1.6	23	砂岩	使用痕不明
5	7号住居址	瓦	9.8	5.0	1.5	.115	粘土質岩	
6	表塚	打製石斧	12.1	7.1	2.4	240	尾岩	
7	14号住居址	"	15.3	4.6	(2.9)	270	"	
8	17号住居址	"	(5.3)	4.5	1.0	49	閃綠岩	剥~刀部欠損
9	御土	"	6.5	9.6	(3.0)	20.5	褐灰岩	



第42図 鉄器(1)

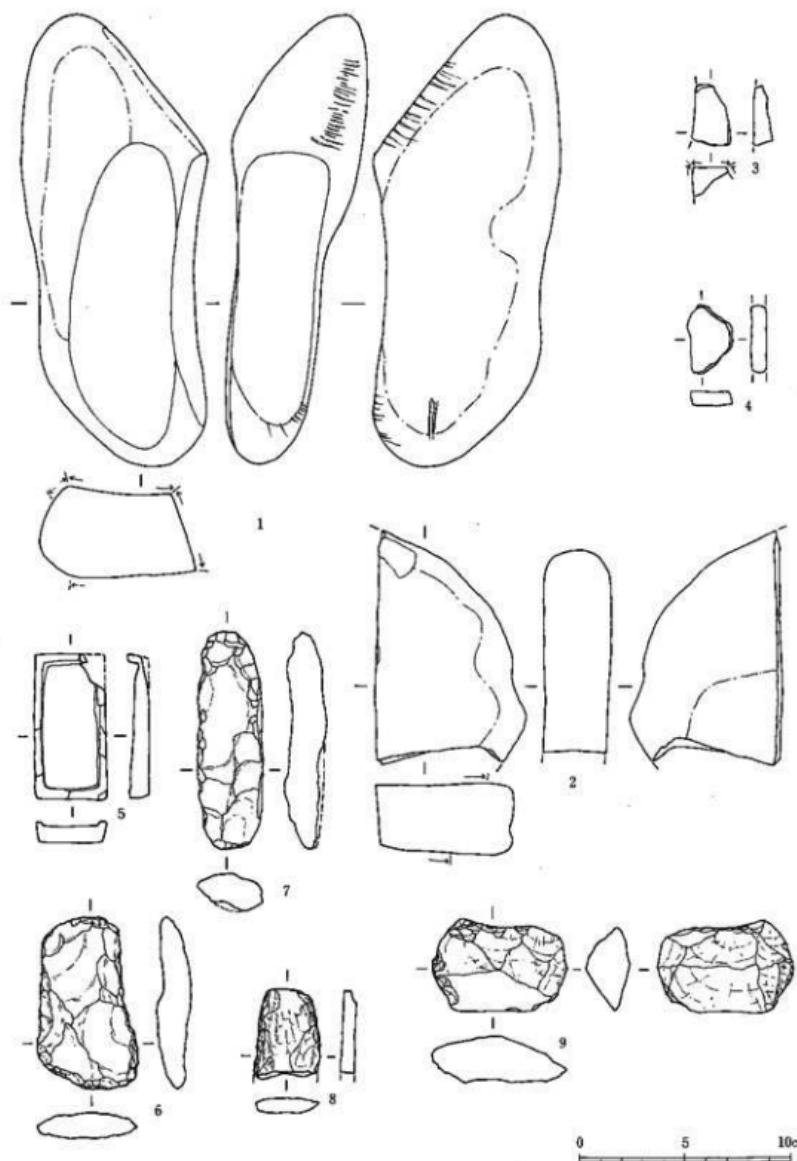


第43図 鉄器(2)



第44図 鉄器(3)





第45図 石器

第4章 調査のまとめ

小原遺跡の所在する芳川地区には、遺跡が存在することは古くから知られていたが、昭和61年に高畠遺跡が調査されたのみで、実体はよくわからなかった。この未知なる地に調査のメスをいれることができた意義は大きいと言える。前章では、遺構・遺物についての事実報告を行なってきたがここではその成果と若干の問題点について触れてみたい。

周辺遺跡の節でも触れたが、従来、小原遺跡の範囲は芳川小学校の南側一帯とされていた。今回の調査ではその中心部よりもJR篠ノ井線付近のI・II・III区とXII区に集中して遺構が検出された。このため小原遺跡の範囲は、やや東側へ拡大し、高畠遺跡と隣接する形となった。この分布状況の一つの要因としては、地形的な条件があげられる。詳細には第2章第1節を参照されたいが、JR篠ノ井線から西側がやや微高地を形成していたことが指摘されている。遺構分布状況に時間的な要素を加味してみると次のような様相を呈する。

奈良時代末～平安時代前半：2・3・4・10・15・16・18・19・21・22（住居址No）

平安時代前半～中頃：1・8・17・20（住居址No）

中世（13C～14C）：7・14（住居址No）

上記以外の遺構も、ほぼ奈良時代末～平安時代中頃、または中世の同時期に属すると考えられる。のことから、小原遺跡が本格的に居住地として利用されるのは奈良時代末になってからであり、平安時代中頃に絶滅した後、再び中世に開拓される。それ以前については、縄文時代の土器小片と石器が数点検出されたものの、遺構は認められなかった。短期間の生活の場や生産の場として当該地を利用した可能性はあるものの、古代まで集落が存続していたとは断言できない。古代の遺構をみてみると、奈良時代末から平安時代前半にかけて多く集中する傾向にある。遺構の遺存状況は決して良くなく、遺物の量も決して多い方ではない。土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄器等がみられるが、変わったところでは、20住の床面よりアワが出土している。^(注1)

ここで、この辺りに最初に開拓の手が入れられた古代の歴史的な背景について少しふれてみたい。小原遺跡の位置する松本市域は、「倭名類聚抄」所載の筑摩郡に含まれる。この中に「良田」・「宗賀」・「辛犬」・「錦服」・「山家」・「大井」の六郷が存在するという記述がある。本遺跡の位置する芳川地区は、良田郷に所属すると推定されている。鳥居峠を越えた吉蘇路（木曾路）と善知鳥峠を越えた東山道は郷内で合流し、「覚志駅」が設置されていたと考えられている。その位置については、本遺跡の周辺である芳川村井町が有力視されているが、今回の調査では直接それに結びつくような資料は得られなかった。この地区的開拓が進められた時期については、文献上からははっきりと窺うことはできないが、「統日本紀」延暦8年（789）5月条には、「信濃國筑摩郡人外少初下後部牛糞、無位宗守豊人等、賜姓田河造」とあり、田川沿いの、おそらく良田郷にも渡来人が定着しており、この地の開拓に関与していた可能性がある。

小原遺跡出土遺物の中で特記すべきものとしては、文字関係資料があげられる。15住からは、円面硯及び墨書き土器が出土した他、8住、16住、19住にも墨書き土器がみられる。具体的には、8住からは「又」、「背」^(四)、15住からは、「背」、16住からは「又」が3点、19住からは「餘」の文字が観察できる。15住と8住は、この集落の最古段階の住居であり、集落の開発が始められた当初から識字層の存在が認められる。この有力者を中心とする開発が始まる背景には、三世一身法(723年)や整田永世私財法(743年)などに代表される当時の班田制の行き詰まり、開発を奨励する国家政策や、国府の筑郡の移転、吉蘇路の開通などがあげられる。このように開発が始められた小原遺跡も、平安時代中頃～後半には途絶えてしまう。文献からみると9世紀には信濃に飢饉や災害に関する記事が数多く現れる。仁和3年(887)、4年(888)と連続で起きた地震と大洪水は信濃に破壊的な大打撃を与えた。小原遺跡にその時まで集落が営まれていたかは微妙であるが、この良田郷も例外ではなかったと思われる。荒廃の進んでいた古代村落社会に大きな影響を与えたであろう。

小原遺跡が再び居住地帯として利用されるようになったのは中世(13世紀～14世紀)になってからである。古代の居住地域より西へ約200m程寄ったXII区に遺構が集中する。住居址4軒、竪穴状遺構4基、櫛列3棟、土坑・ピットが多数検出された。ただ現場で、竪穴状遺構と住居址との混乱をおこしてしまったため、本来ならば竪穴状遺構とした方が適当であるものを住居址として扱ってしまっている。遺物は少なく、土師質土器、古瀬戸系陶器、青磁、鉄・銅製品が僅かに出土したのみである。

鎌倉時代には、かつての良田郷であった範囲中には、村井郷、吉田郷、小池郷、赤木郷、熊井郷、塩尻郷などをみることができる。小原遺跡は村井郷に属していた。村井郷は犬飼氏(大曾氏)の一族である村井氏が地頭であった。その証としては、建武三年(1335)九月の足利尊氏下文、三浦介平高継宛のものがある。

「可令早領知(中略)信濃國村井郷内小次郎知貞跡(下略)」(宇都宮文庫)

小次郎知貞の時、北条時行の中先代の乱に加担して、敗北を喫し領地を没収され三浦介平高継に与えられたのである^(五)。

文献上からは、村井氏の存在が窺えるが、実際のところはほとんどわかっていない。ただ、中世のものと考えられる溝が4本検出されており、湧水のない芳川地区の用水せぎの開発の一端がうかがえよう。

以上、歴史的背景に触れながら記してみたものの不明の点が多く、今後の資料蓄積、さらに考古学と文献史学双方の知見の照合により、村井地区の具体像が解明されてゆくことになろう。

註1 熊義直氏の御教による。出土したアワは現存しない古い品種のことである。

註2 小片で固化していないため写真を参考にされたい。土器は、内黒土器(黑色土器)のほか焼成である。

註3 村井氏については、岩井俊雄氏の「松本市芳川区小屋船跡と村井氏」「信濃」33-2の研究を参考とした。



第1号住居址



第1号住居址カマド



第1号住居址



第3号住居址



第3号住居址カマド



第4号住居址遺物出土



第5号住居址



第6号住居址



第2号住居址(奥)第7号住居址(手前)



第7号住居址遗物出土



第8号住居址



第9号住居址(奥)第13号住居址(前)



第10号住居址



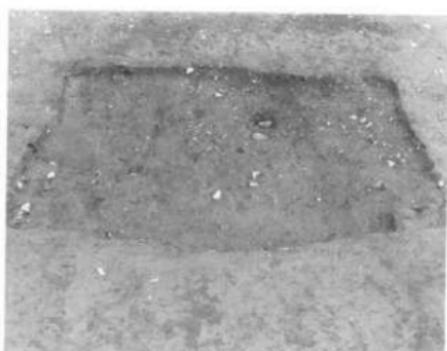
第10号住居址カマド



第10号住居址カマド



第15号住居址遺物出土



第15号住居址



第17号住居址



第21号住居址



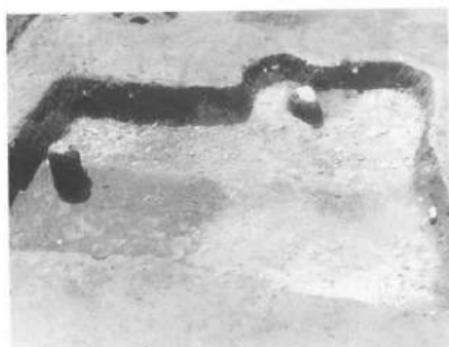
第22号住居址



第23号住居址



第24号住居址



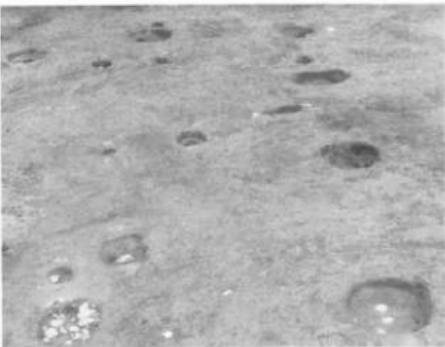
第25号住居址



第27号住居址



第29号住居址
第54・55号土坑



第1号建物址



第1号土坑



III区全景(東より)



XII区全景(東より)



芳川小見学



16



23



32



52



53



59



66



95



82



64



83



86



87



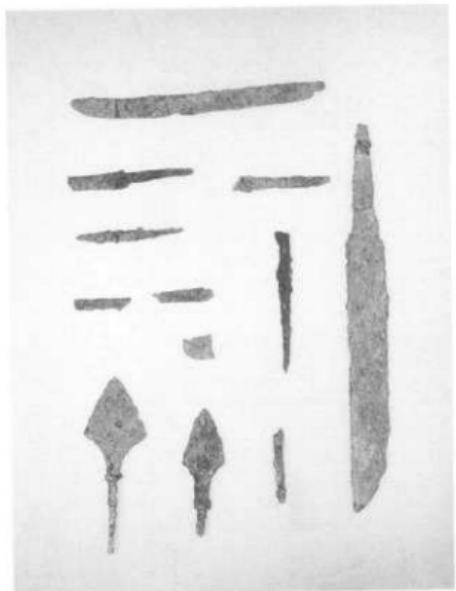
88



100

第7回版

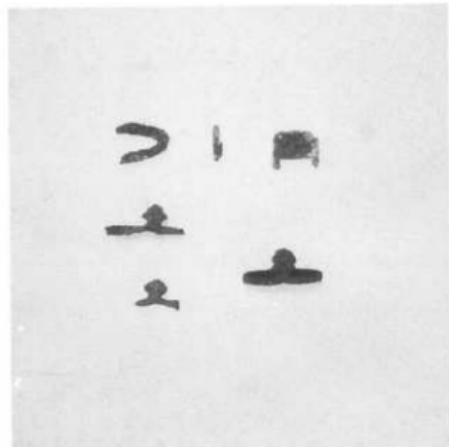
第8号住居址出土墨吉土器



鉄器(1)



鉄器(2)



鉄器(3)



石器

松本市文化財調査報告 No.86

松本市小原遺跡

平成2年3月20日 印刷

平成2年3月20日 発行

編集 松本市教育委員会
〒390 長野県松本市丸の内3-7
Tel 0263(34)3000

発行 松本市教育委員会

印刷 川越印刷株式会社

